

鴻池幸武宛て豊竹古鞆太夫書簡二十三通

—— 鴻池幸武・武智鉄二関係資料から ——

小島 智章
児玉 竜一
原田 真澄

鴻池幸武・武智鉄二関係資料について

本稿で紹介する鴻池幸武に宛てた豊竹古鞆太夫の書簡二十三通は、平成二十二年度に演劇博物館に籍を置く、演劇映像学連携研究拠点の研究資料として古書店から購入したもので、同拠点の公募研究チーム（代表・児玉竜一）より演劇博物館に寄贈する形で公開するものである。鴻池幸武および武智鉄二に関連する資料群のなかに含まれていたもので、購入元の書店から特に明かしてもらったところによれば旧蔵者は吉田幸三郎とのことである。鴻池幸武の旧蔵品と、吉田幸三郎自身による収蔵品が、最終的に吉田の手元にあったと推測されるが、吉田幸三郎が所蔵していた書籍をはじめ多くの旧蔵品は散逸したと聞くので、元の全貌はもはや確認するすべはない。

まずは、仮に「鴻池幸武・武智鉄二関係資料」と名付ける資料群の全体を概観しておく。資料は、(一) 書簡、(二) ノート・草稿

類、(三) 小冊子類、(四) 上演パンフレット、(五) 写真、(六) その他、以上六つに分けられる。

(一) の書簡は、以下に翻刻紹介する、鴻池幸武宛ての古鞆太夫書簡二十三通のほか、大谷友右衛門（六代目）、文字太夫改め六代目竹本住太夫、斎藤清二郎、文楽座中村利雄からのもの、各一通がある。ほかに「東京都京橋区／中村□□郎」と封筒の差出人部分が破れているものがあり、封筒のなかには若き日の七代目中村芝翫のプロマイドが三枚入っている。すなわち、差出人は当時の名跡「中村児太郎」であろうと推測される。

(二) ノート類で最も注目されるのは、「金杉彌太郎氏事／豊竹古鞆太夫／御秘蔵書籍目録／昭和拾壹年拾月壹日現在」と表紙に記された、レポート用箋六十九枚に及ぶ筆写目録である。豊竹古鞆太夫所蔵の浄瑠璃資料は、昭和二十年三月十四日の大阪大空襲によって

灰燼に帰したことが知られているが、本目録は書籍（浄瑠璃丸本ほか）に限ってはあがあるが、戦前においてその内容を記録した貴重なものとなる。小島が研究発表（平成二十三年十二月歌舞伎学会）を用意しているので、詳細はその報告に俟つ。ただしこのノートは鴻池幸武の手跡ではなく、別人によって筆写されたと思われる。考証は別稿に俟ち、後記のみを転写しておく（段落は本文通り。意味の取りやすいよう適宜一字空きを設けた）。

昭和拾壹年九月廿八日午前十時過

住吉の豊竹古靱太夫事金杉彌太郎師を訪問 故石割氏葬儀の席上にて同師に初挨拶 後に新義座興行にて拜写せり。偶々廿六日文楽座にて同師に廿八日に訪問したき趣を述べて快諾を得たり。

斯くして同師宅にて親しく警咳に接する榮を得たり。容童顔の師は髻袴の書生輩に謁するに礼を極めたり。かゝる平常の柔しさを親しく見るにつけ同師の舞台の緊張を誰か推案し得るや。舞台にあつては一分の隙もなく古戦場にての武士の魂は躍如たるものがあるやうに覚ゆ

対談約二時間珍書を随分拜見する機会を得たり同師所蔵の目録と八百屋お七（後日附の分）を拝借せり 前者は同師一日も欠く能はざるものなるによく御貸し被下たりと同師の寛容にしてよく人を誘導する所以を知りたり 以て知遇に応ずべく至急書写せり

九月卅日写了

◎随分誤字と覚しきもの多数見当りたり。これらはすべて正字

に書換へるが至当なれども正字正訓は他の書によりても知るを得べく考へたるによりすべて古靱師書写の儘写せり。

鴻池幸武の自筆ノートは、大正末期から昭和にかけての文楽興行での配役を筆写したものなど二冊。ごく一部に上演時間のメモがあるのが貴重。また、ノートの内の一冊に、漢字とローマ字で署名の練習をしたと覚しき試し書きがあり、「Yoshitake」「Y Konnoike」とある。従来、武智鉄二がペリかん社版『道八芸談』（昭和62年）の解説で「幸武」とルビを振ったその典拠がつかめなかったが、鴻池「幸武」の読みが「よしだけ」であることが、これで確定できる。

草稿類はメモ程度のものだが、三味線の持ち方の解説らしきものがあり、写真のなかにこれに対応するかと思われるものがある。図解による啓蒙書のような計画があつたのであろうか。

「女形にて足のある人形控」という一枚のメモもある。同様の文章をきかないので写しておく。

- 一、仮名手本忠臣蔵 裏門の段 おかる
- 一、加賀見山旧錦絵 草履打段 岩藤
- 一、全右 奥庭の段
- 一、全右 長局の段 おはつ
- 一、全右 奥庭の段
- 一、中将姫古跡松 雪責の段 岩根御前
- 一、大江山酒吞童子 浅草雷門 おのぶ
- 一、碁太平記白石噺 揚屋の段 おのぶ
- 一、全右 日向島の段 糸瀧
- 一、嬢景清八嶋日記

一、明烏六花曙 山名屋の段 おかや

一、伊賀越道中双六 新関引拔 お福

一、戻り駕色相肩 たより

一、花競四季寿 海女

一、全石 関寺小町

一、増補大江山

若菜

(三) 小冊子類は、文楽関係の冊子三点。

「豊竹古靱太夫追善」と墓石に記した意匠の袋に収められた『追
俣 雁のつらね』七丁(無刊記)は、初代古靱太夫の追善句集。

『二世義太夫竹本播磨少掾』十八頁は、昭和三年九月八日の二世
義太夫追慕会と墓所(夕陽丘の天瑞寺) 標石寄付を記念したもの。

木谷逢吟「二世義太夫竹本播磨少掾に就いて―初代竹本政太夫―」、
阪井久良岐「二世義太夫標石揮毫に就いて」、福良竹亭「阿波浄瑠
璃と私の関係」を収める。「石割蔵」印があり、石割松太郎旧蔵。

『文楽展覧会出品目録 附・人形浄瑠璃年表』二十四頁は、昭和
十六年四月二十二日から二十九日まで大阪高麗橋の三越で開かれ

た展覧会(上方郷土研究会主催・大阪市後援)の出品目録。雑誌

『上方』創刊十周年記念の展覧会で、鴻池幸武も「二代目團平肖像」
「摂津大掾賛、越路太夫画」の二点を出品している。

(四) 上演パンフレットで最も注目されるのは、昭和十五年五月
二十七日から二十九日に飛行館で上演された「創造劇場第1回試
演」のそれである。大谷廣太郎(のちの四代目中村雀右衛門)を代

表とするこの試演会は、鴻池幸武・武智鉄二演出による「太功記十
冊目/尼ヶ崎の場」が上演されたことで名高く、これが武智鉄二の
初演出にあたる。他に、梅本重信演出「田舎道」(阪中正夫作)、久
里原一登演出「アルギメネス王」(ダンセニイ作・松村みね子訳)
が上演された。パンフレットには、鴻池幸武「太功記十冊目」に
就き、梅本重信「廣太郎君」、久里原一登の無題の一文、鈴木英輔
「創造劇場」に、山岸荷葉「風に鳴る若竹よ」を収める(全十四
頁)。

ほかに、戦後の武智鉄二演出作品のパンフレットが五点。これは
吉田幸三郎自身が観劇したものである。

「修禪寺物語」は、昭和二十九年十一月四日から六日に大阪朝日
会館で、関西歌劇団・関西交響楽団によって上演されたオペラ。朝
日放送編成局長原清「五年がかりの処女作」、朝比奈隆「修禪寺物
語の初演に当つて」、清水脩「日本のオペラ・大阪のオペラ」、武智
鉄二「演出のむずかしさ」、岸井良衛「綺堂先生 最初の日の思い
出」、北岸佑吉「面のことども」、坂東鶴之助「歌舞伎と歌劇」、岩
尾良治「オペラと放送」を収める。

「能・狂言の様式による創作劇の夕」は、昭和二十九年十一月
十八日から二十日に新橋演舞場で上演された「夕鶴」(木下順二作)、
「東は東」(岩田豊雄作)の二本。木下順二「上演にあたって」、菅
泰男「東は東」―戯曲と演出と―、武智鉄二「演出雑記」、戸板
康二「新しい「夕鶴」、安藤鶴夫「親展」、武智鉄二様」、沼艸雨
「夕鶴」抄―「東は東」のことも―を収める。

「関西歌劇団創作歌劇第一回公演」は、昭和三十年六月十一日か

ら十二日に大阪三越劇場で上演された「白狐の湯」(谷崎潤一郎原作)と「赤い陣羽織」(木下順二原作)の二本。朝比奈隆「日本民族の新しい演劇」、武智鉄二「創作歌劇の創造」、芝祐久・大栗裕「作曲者のことば」、吉村三郎・田中照三「美術を受持つて」、野口幸助「関西歌劇団のこと」を収める。

「関西歌劇団公演 第二回創作歌劇」は、昭和三十一年三月十三日と十四日に産経会館で上演された「マンドリンを弾く男」(谷崎潤一郎原作)、「卒塔婆小町」(三島由紀夫原作)の二本。朝比奈隆「新しい夜明けは訪れている」、武智鉄二「谷崎・三島歌劇―前進する創作オペラ―」、谷崎潤一郎「マンドリンを弾く男」について、芝祐久「作曲者のことば」、三島由紀夫「卒塔婆小町」について、石桁真礼生「卒塔婆小町を作曲するまで」、S「第一回創作歌劇の事」、野口幸助「歌劇団から」を収める。

「関西歌劇団第三回創作オペラ公演」は、昭和三十二年三月二十六日と二十七日に大阪産経会館(以後、京都弥栄会館、神戸新聞会館、宝塚大劇場へ巡演)で上演された「夫婦善哉」(織田作之助原作)。「スタッフのことば」として、武智鉄二「夫婦善哉考」、中沢昭二「夫婦善哉より」、大栗裕「作曲放談・朝比奈隆「私達のもの」・鍋井克之「オペラ「めをとぜんざい」の背景美術」・田中昭三「ある冒険」・岡田猪之介「オペラの照明と夫婦善哉」、森繁久彌・小島幸・木村四郎「柳吉と蝶子―森繁久彌を囲む座談会―」、中谷清「オモロイなあ大阪弁オペラ―織田作と「夫婦善哉」―」、前田重信・竹中タツ「織田作之助の思い出」を収める。「武智鉄二後援会設立のお知らせ」という囲み記事のあることも、興味を

ひく。

(五)写真類は膨大な量に及ぶため、未整理の段階にある。大きく分けて、歌舞伎関係(明治の古写真、明治後期からの上方歌舞伎、昭和期の東京歌舞伎など)、文楽関係(絵はがき、文楽関係資料、文楽関係者墓所の写真)、美術関係、人物、を中心としている。

この内、文楽関係者の墓所の写真は、後に掲げる古鞆太夫との書簡でも、やりとりをしている様子がかがえるので、鴻池幸武旧藏品としておかしくないが、美術関係は意外の観がある。美術関係は陶器が中心で、祥瑞の作品の写真を多く含むところから、『祥瑞の研究』の著書も有する石割松太郎の旧藏品ではないかと推測する。小冊子『二世義太夫竹本播磨少掾』が石割松太郎旧藏品であったように、石割没後に遺品を引き受けたとすれば、歌舞伎関係写真にも石割旧藏品が多く含まれるのではないかと思われる。

文楽関係者の墓所の写真の掲載には、墓所の現管理者への許諾等の問題もあり、別稿を期したい。

鴻池幸武と武智鉄二が同席している写真を、図版として掲載しておく。「第一回浄瑠璃研究会」として日比谷の東洋軒での写真である。食卓について腰掛けている右から、鴻池幸武、武智鉄二、金川文楽、石井傳一、平井眞次郎、吉坂玉傳、大津山栄子、食卓の左側に腰掛けている三人が右から、石井健太、斉藤鳥之助、高橋十三三。後ろに立っているのが右から、三芳有楽、福安信次、川藤金次郎、中川愛水、井上信、松尾武市、池田三三、中村蘇鳳、斉藤拳三、中野三允、大山一径、岡田蝶花形、川口子太郎、高橋宮古、

図1「第一回浄瑠璃研究座談会」



杉本英、新藤泰観、内田富太郎、是沢九似、小島古清、芳野芳子、とある。この内、金川文楽については金川文楽『素ッ裸人生』（昭和38年・金剛出版）、岡田蝶花形については岡田道一『明治大正女義大夫盛観物語』（昭和28年・明德印刷出版社）、川口子太郎については戸板康二『演芸画報・人物誌』（昭和45年・青蛙房）を参照。

(六) その他として、駅のスタンプのコレクションや、鴻池幸武の名刺が残されている。

豊竹古鞆大夫書簡について

以上のような資料群のなから、本稿では(一)の内より、鴻池幸武に宛てた豊竹古鞆大夫の書簡二十三通を、翻刻紹介したい。

鴻池幸武は、近世以来の大阪の豪商鴻池家の十一代当主、善右衛門幸方の二男として大正三年七月十五日に生まれた。早稲田大学で石割松太郎に学び、昭和十二年に国文学科を卒業している。その後、早稲田大学演劇博物館に奉職しているはずなのであるが、正式な職名と嘱任時期は、その記録を見出していない。「ぞろつとした扮りの若旦那風」で、(吃音と伝えられるが)「たしかに少し不自由だったかと思う」というのが、演博時代にその風貌に接された郡司正勝先生から十数年以前に兎玉がうかがったところである。校友会名簿では、昭和十七年の住所は大阪の今橋二丁目(近世以来、鴻池本宅のあるところ)、昭和十八年は「目黒区自由ヶ丘三三二」と届けているとのことで、これが奉職時期と関わるのかどうか、なおも調査を継続したい。蒲柳の質のうえに吃音という、軍隊には最も不

向きと思われる御曹司が、応召されて出征、台湾をへてフィリピンに渡り、昭和二十年四月十八日戦死した（鴻池合名会社『鴻池家年表』）。戒名は「英徳院文宗幸武居士」で、大阪市中央区中寺町の顕孝庵に墓所がある。

さて、全二十三通（二十四通目として、写真のみが封入された封筒が残されている）におよぶ書簡は、鴻池幸武からの手紙を受けての返書が大半で、幸武による浄瑠璃史上の名跡や曲目に関する質問に、豊竹古鞆太夫が誠心誠意答えているものが多くを占めている。石割松太郎の薫陶をうけて浄瑠璃史研究に精進した幸武と、近代文楽史上で有数の学識を誇ったと考えられる古鞆太夫の間に交わされた、きわめて真摯な学術的交流をしのぶことができる原資料の出現といえるだろう。残念ながら、鴻池幸武から古鞆太夫へ渡った手紙が現存していないので、正確なやりとりの次第は明らかにできないが、ほとんどの書簡は封筒に貼り紙がなされて、内容を摘記してあるのが注目される。昨年、神保町の矢口書店の目録に、武智鉄二宛献呈署名入り鴻池幸武者『道八芸談』が出現（売価五万円）し、目録に署名の影印が出たほか、同店のショウケースに数ヶ月間にわたって原本が飾られていた。そこにみる署名の筆跡と、書簡番号9に記された注記の筆跡は紛れもなく一致し、戦前版『吉田栄三自伝』および『道八芸談』の背表紙が、鴻池幸武本人の筆跡であると知ることができる。封筒の貼り紙は、まさにこの幸武の筆跡で、幸武が古鞆太夫からの書簡を資料として大切に整理していた様子うかがわせる。

書簡二十三通は昭和十年から昭和十五年に及ぶ。古鞆太夫の表現

を借りれば、「表もうらも日々々歳くくの声ばかり」（書簡番号10）という日中戦争下の時局である。大正三年生まれの鴻池幸武は数え年二十二歳から二十七歳、明治十一年生まれの古鞆太夫は五十八歳から六十三歳にあたる。古鞆太夫が惜しみなく浄瑠璃史上の知識をわかち与え、鴻池幸武が次から次へとそれを吸収する有様が想像されるが、時には古鞆太夫が幸武に文章の添削を行う（書簡番号22）のには驚く。鴻池幸武（ひいては、恐らく武智鉄二も）の文楽知識形成に、古鞆太夫の果たした役割が大きいことは、従来からも推測できることながら、その現場を示す資料といえよう。研究に関わる事柄だけではなく、まさに同時代の肉声として、昭和十一年六月二十九日午前一時四十五分に死去した石割松太郎の、逝去第一報に接した古鞆太夫が早朝に電報をうけて午前中に鴻池幸武への手紙を投函する様子（書簡番号5）、巡業の苦勞への愚痴（書簡番号19）など、他では知られぬ側面も垣間見られる。古鞆太夫の一貫した姿勢としては、先に掲げた著述目録の筆者がいうところの「師は幣袴の書生輩に謁するに礼を極めたり」という姿勢が、印象的である。もちろん、鴻池幸武はただの学生、単なる愛好家ではなく、鴻池の金看板を背負った人であるから、織太夫の襲名にあたっては見台をお祝いして古鞆を感激させ（書簡番号13）、白井松次郎に面会する機会を得ては、古鞆太夫から文楽への直言を依頼されている（書簡番号22）。その恵まれた境遇を存分にいかして研究を深める幸武に対して、年の差をこえた知己を見出して丁寧に接する古鞆太夫の姿勢が、文面からうかがえるといえよう。

本稿では、正確に書簡本文を紹介することを旨としつつ、読解の便宜をはかるための注解を加えることとした。

本稿作成に先だつて、早稲田大学大学院文学研究科の児玉ゼミで講読資料の一環として本書簡群を取り上げた。そこでの成果を取り入れる形で、原稿化にあたっては、小島智章と原田真澄が代表として取りまとめに従事し、注と演者名・作品名便覧は小島が担当した。淵田裕介氏・今岡謙太郎氏をはじめ、下野歩、富永竹行、金昭賢、川辺美香、長谷川祥子の各氏の教示に感謝する。ほかにゼミに参加したのは、桑原博行、楊静、高井詩穂、森哲郎、デニス・ゾーメルハウス、成田美穂子、宮本祐規子の諸氏である。【以上、児玉記す】

凡例

- ・配列は内容から推定される年代順として、整理の便のための書簡番号を付した。演博での登録番号も、この順に応じて付すよう依頼した。
- ・封筒の記載、本文の順に記し、それぞれに含まれる付帯情報については、適宜「」を付して記した。差出人は朱の角印で捺されることが多いので、角印の印影を図版2・3に掲げ、その略称を記したところがある。
- ・翻刻にあたっては、原則として通行の字体に統一したが、固有名詞などに一部原表記を残したところもある（「古鞞太夫」など）。
- ・合字はひらがなで表記した。「ハ・ミ・ニ」なども、ひらが

な文脈で用いられているものは「は・み・に」などに改め、「之」もひらがな文脈で用いられているものについては「の」に改めた。書簡と別に資料として列挙してある記述については、片仮名表記を残した。

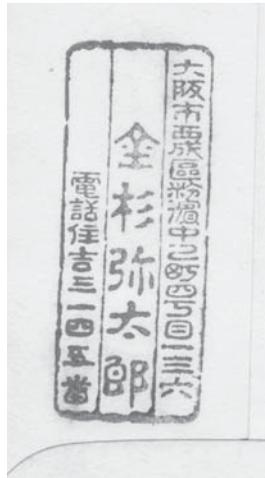


図2 「金杉弥太郎」角印

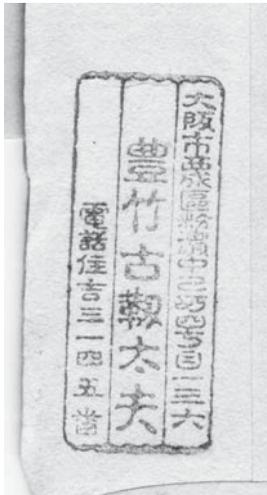


図3 「豊竹古鞞太夫」角印

本文や封筒記載での改行は「／」でそれを示し、再現することをしなかったが、本文末尾の日付や宛名は原表記通り改行して通読の便をはかった。また、項目を列挙するような記述では、通読の便のためにそれを再現したところがある。字間の空きも再現しなかったが、本文末尾の日付と差出人の間や、「同」の意味を示す「ク」の後などには一字空白を設けた。書簡が複数の便箋に渡っている場合は「／／」で示した。判讀が不可能な箇所は、「□」で示した。

●書簡番号1 昭和十年十月六日付け

【封筒表】

【宛先】 東京市目黒区緑ヶ丘／公家様にて／鴻池幸武様／御侍史

【消印】 住吉／10.10.6／后04 【切手】 三錢一枚

【貼り紙】 「平信」

【封筒裏】 「封十月六日」

【差出人】 「金杉弥太郎」角印

【本文】

御機嫌お宜敷何よりと／存じ上其後御不沙汰／御赦し被下又早速と／御手紙頂き難有／石割先生^①よりもおたよりをいたゞきあな様／御一緒にて御下阪相成／ますよふの御文面に／御ざりました是非／御越の程を相待居り升／中車老も舞台を／再びふまれました／さだめし／嬉しい事に御ざりませふ／又忠臣蔵初版本／御手に入りました由／おあきで／御ざり／ましたらば一度拝見／願度と存じ／まする／時候不順に御座ります／此上共に御尊体御大切に／余は

御面会の節／万々

十月六日 古鞞／拝

幸武様

●書簡番号2 昭和十年十一月二日付け

【封筒表】

【宛名】 東京市目黒区緑ヶ丘／三三二六／公家様御方／鴻池幸

武様／御侍史

【消印】 住吉／10.11.2／后04 【切手】 三錢一枚

【貼り紙】 「平信」

【封筒裏】 「封十一月二日」

【差出人】 「豊竹古鞞太夫」角印

【本文】

拝啓毎度御たより難有／此頃中は失礼申上ました／本日御手紙拝見致し／ますると北條時頼記の／鉢の木の追善本を／お求めに相成ました由／夫れは玉樹^②からと違ひ／まするか此間私も一冊／見かけましたが余り虫喰ひ／なり／御存じの通り文章も別に／かわりました事もなしいたし／ますので其俵にいたし／ました／浄るりに関しての御研究／下さいます事を私は／何より難有嬉しく／存んじて／おり升／御申附に寄りますして／手元に／御ざりました物を／一二冊／御送り／いたします

一冊はしのお飾^③／是は初代寛治より／五代迄の事を／のせてあり升々野澤の面影^④／是は初代喜八郎より／当代の野澤家の物迄／寄せて御ざいます

〃 野澤のながれ／是は六代吉弥など／初代二代三代四代五代吉兵衛／六代吉兵衛／吉平吉作喜胤

もしも前二冊おもち／なつて／御ざいましたせつにわ／お預り下さいまして御地へ／参りました時に又おかへして／頂きます万一御手元に／御座りませぬ事なれば／永くおとゞめ下さい／ますれば幸甚と／存じます／此度の／番附も延引あしからづ／右本三冊と御恩借の／忠臣蔵丸本共に差入れ／おきます永い事／おかり致しまして難有是も／御礼申上升／あと先きに相成しましたが／沼津もおかげで無事に／つとめ終りました夫れに／只今文楽より新玉氏／参りまして本月九日に放送／いたす事を頼みに参りました／承知致しましたゆへ面白くは／御座りませぬが御聞き下さいませ／追々とお宅に伺ひ升／故何卒御身御大切に／石割先生へも宜敷／おつたへを願上

升／先は御礼旁々／右本御送附／御報迄／早々

十二月二日 金杉／拝

鴻池様

只今小包にて本は御送り／申上しました

●書簡番号3

昭和十年十一月七日付け

【宛名】 東京市目黒区緑ヶ丘／式三二六／公家様御方／鴻池幸武様／侍史

【消印】 住吉／10112／后48【切手】 三錢一枚

【貼り紙】 「二世喜八郎及三二／名跡の事」

【封筒裏】 「封十一月七日」

【差出人】 「金杉弥太郎」角印

【本文】

御手紙拝見本着致しました由／御入用の分はどふぞお納めを／願升御手紙の通り／宝暦七年二月一日姫小松子日の遊び／竹本座興行の時三二改野澤喜八郎／と近世邦楽年表に記しあり升るが／改名の事は何かの写違ひでわなかる／かと御送り致しました本を勝平氏が／こしらへ升る時に私しらとより／に／嘶しをいたしました事も御座りました／野澤家にも鶴澤三二から喜八郎に／改めました人わないので有ります／よく活字の写違ひが邦楽年表にも／たくさん有りまして間ぢかに弥吉を弥七／とちがつて有る所も有り外にも数多／く写違ひが御ざります／此三二改としてある番附を一度／見たい事とより／私しわさが／しており升三二名跡は此頃／死去致しました三二が八代目で私しが／此人の本全部を預つておりまして／右名前の譲渡書が二代から三代三代から／四代と云ふよふに皆御座います／が三二から／喜八郎にわなつて有る人わ御ざいませぬ／是はたしかに写違ひと存じ升／又三二から蟻鳳に成つた方も有るよふに／書であるものも見ております／昔はついででも其披露もせづに／おわる事もあつたよふに見うけます／ものも有りどふも大昔の事でよく／わかりませぬが譲渡しの書たものがある／以上は夫れにもとづきますと喜八郎／三二はたしかにありませぬ／伊勢物語の(チヨボ)番附拝見致し／ますとしかと其様に思ひ升／曾和太夫と云ふ名前も有りました／よふに見うけ升(此間の丸本に)／やはり義太夫では京都が書御し／二代若太夫旧名へ返つて嶋太夫がはじ／めて語つたものに相違御座りませぬ／春太夫は二段目と道行とを語つて／居

り升／番附御見せ下さいまして難有ふ御ざり／ましたたしかに此中へ／入れておきます先は御礼迄／何れ又々御面会の上余は万々

十一月七日 金杉／拝

鴻池様

●書簡番号4 昭和十一年六月二十九日付け

【封筒表】

【宛名】 東京市目黒区緑ヶ丘／公家様御方／鴻池幸武様／御侍史

【消印】 住吉／11.6.29／后04 「切手」三錢一枚

【貼り紙】 「石割先生の死去の／際」

【封筒裏】 「糊六月廿九日」

【差出人】 「豊竹古鞆太夫」角印

【本文】

早速の御返事難有拝見／いたしました昨日午前に／投着直様御礼も申あげ／まずはづ当方昨日は／久し／ぶりに梅雨しと／と／降出し／何共申様のないやな日で／御座りましたので私しの／あたま又／／悪しく／ふら／／致／し御手紙拝見後／ふせりましたので／今日に御礼を申あげ且は／先生へも御見舞を／申あげる／心づもりで起きました所へ／電報はつと思ひましたら／やつぱり先生御死去の／御報で有りました／何共いへませぬ気分／に／相成りました／まだ奥様へも御目にも／か／らず／何んと申上げて／よいやらとにかく／電報でおくやみを／申上ておき／ました／御見送りに私しが東上／いたし度／とわ思ひますが何さま／病氣後の事¹³思ふ／よふにも／参りかねいづれ御葬式の／日取わかり次第に親類の／者を名

代に御送りいたさせ／たいと思ひおります／実に落胆いたしました／奥様へも御手紙わさし出し／まするが御尊君様よりも／宜敷御つたへの程／御願申上升／阪地へ御帰邸の上わ／是非／御遊びに御越の程を／相待おります／先わおたより御礼迄

六月廿九日 古鞆／拝

鴻池様

●書簡番号5 昭和十一年七月十三日付け

【封筒表】

【宛名】 市内東区今橋鴻池様御本邸／鴻池幸武様／御侍史

【消印】 住吉／11.7.13／前8-12 「切手」三錢一枚

【貼り紙】 「丸本の請求」

【封筒裏】 「封七月十三日」

【差出人】 「豊竹古鞆太夫」角印

【本文】

前略扱本日は／わざ／／御来駕下さいまして／難有いつ迎も失礼／ばかり致し何の御風情も／なく何卒御赦願上升／先生の御断しを承り／かづ／の御心づくし／さだめし御本人も嬉しく／よろこんで御死去なされ／ました事と存じます／今後も何角と御厄介／の御事とぞんじ／あげ升るが／万事宜敷御とりはからひ／願上升扱又／鳥渡御耳に入りました／丸本は

○・建仁寺供養

・復鳥羽恋塚

・紀三井寺

○・傾城躑躅ヶ岡

○ 山王権現八千代玉垣

○ 隅田川（加賀）

風流たばこ恋集

嬌柳妹背的的

是を御願ひして／ありましたが／此丸印は淨るり丸本で／他の四冊は義太夫で／有りましたか／又角太夫節か／土佐ぶし又は加賀掾で／有りましたか鳥渡わすれ／ました／万一御調べなりまして／御ざいましたらば／御無理を願度そんじます／又御上京二相成ましたれば／御目にわ／か、りませぬが亡未人奥様へ／宜敷御つたへを願上／お暑さも追々きびしく／相成升るゆへ／御身御大切に／又く来月御目に／か、り／万々／先は御礼旁々／右御願ひ迄／早々七月十三日 金杉／拝
鴻池幸武様

●書簡番号6 昭和十一年七月二十五日付け

【封筒表】

「宛名」東京市目黒区緑ヶ丘／三一六公家様にて／鴻池幸武様

／侍史

【消印】住吉／11.7.25／后04 「切手」三錢一枚

【貼り紙】「石割先生追善浄／るりの返事」

【封筒裏】「封七月廿五日」

「差出人」大阪西成粉浜中ノ四ノ壹三六／金杉弥太郎出」

【本文】

廿日出の御尊書難有／拝見仕りました／お、せの通り実にお暑い／事に御座り升／久しぶりに宅におります／ので猶さらにあつると／思ひます／昨年の今頃は病院住居／本年は又やまひの為に／でられず昨日より歌舞伎座の／興行年残念宅で／くしやく／致して／おり升／来月九日の／つばめの事本人帰阪／いたし／ましたので早速申附て／おきました／承知致しておりますゆへ／御休心願升／三味線は豊澤猿糸で／語り升事に／いたしました／又御無理を願上升た丸本／の事も難有万事宜敷／猿口轡の評判帖も／願へますれば／御奥様へ宜敷御願下さいませ／先日より御借用の／番附年号／も／調べて見ておりますが何様／手前共の分も飛び／く／なつて／おりますので／わかる分だけでも／と／思ふてやつております／三十七枚の内二十一枚だけ／私しどもに／ありませぬ／追々とお暑く相成ませふ／此上共に御身御大切に／余は御面会の節／万々七月廿五日 古鞞／拝
幸武様
昨夜は歌舞伎へ御越の／事と存じます

●書簡番号7 昭和十一年十月七日付け

【封筒表】

「宛名」東京市目黒区緑ヶ丘／二三一六公家様ニテ／鴻池幸武

様／侍史

【消印】住吉／11.10.7／前8-12 「切手」三錢一枚

【貼り紙】「大落の事」

【封筒裏】「封十月七日」

〔差出人〕「大阪市西成区粉浜中之町四丁目／金杉弥太郎出」

【本文】

前略／御返事延引御救被下直に／用事にかゝります／大落しの事
／是わ当流義太夫節に／限るよふに御座ります／東にあつて西にな
し／是は違ひます私しが／申ましたわ大落しは／東西にも御ざいま
すが／節の中で／東の方はクルと申て／高く／声を張る所が／あり
まして／西の方にわ此クル所がないので有ります／是は御目に
かゝりました時に／御晰し申上升／大落しの有る最も古き／外題は
どんなものかに対しては／今暫く御待を願ます／是と何大夫が語り
出せしか／との御尋ね是もよく／調べまして申上升尤も／大落しと
申節附も／中途大声の太夫衆が／どなりだしたので大落しわ／成べ
く大きくやらねばならぬと／申事になつたのでせふと／思ひます何
を御覧に／成りまして大落しの／文章は／ずいぶんおどろかされ
る／よふに／大きな文句が書て御座います／百度平と母お辻と／子
供二人の文句で

日高の川に水増して

堤もくづる、

斗りなり

なぞかいて御座います／あんなに大きな声で／どならないでも／よ
いのでせふと思ひます／是は友治郎さんの／おはなし／ですが／三
味線迎も其通り／初代燕三師通称を／山形家と云ふ／后に燕翁と
申された師が／此頃のよふに／一も二も／いつしやうに／掛けて大落
しを弾き／はじめたと申されております／元はあんな事は／なかつ
たのですと／いうていられました／三味線の方は此師が始め／らし

いので大夫の方は／だれと申事は鳥渡／直にわわかりかねるが／
よつぽと腹力のあつた／方なり音声の大きかつた／太夫さんがやり
かけた／もので／御ざいませふ／文章が／大きい事をいうて／有り
升から／そんなに／どならないでも／よい事に／なるので／せふと
／思ひ升／何れ又何かわかり次第に／御報申上升／余り御返事延引
に／相成升るゆへ／鳥渡右の由だけ／御晰申上升た／何れ又御目に
かゝり／まして／万々

十月七日 金杉

幸武様

●書簡番号8 昭和十一年十一月二十八日付け

【封筒裏】

〔宛名〕東京市目黒区緑ヶ丘／二二一六／公家様方／鴻池幸武

様／侍史

〔消印〕住吉／111288／后488 〔切手〕二銭一枚、一銭一枚

〔貼り紙〕「平信」

【封筒裏】「封十一月廿八日」

〔差出人〕「豊竹古鞆太夫」角印

【本文】

前略御免／其後御不沙汰何卒／御救下され／御かわりなく何よりと
／存じ上升／廿七日出の御尊書／只今拝見難有御礼／申のべます／
歌舞伎座より先日／記念品を御送附／下さいました／未だ本わ未着
にわ／御ざりますが近日かへり／ます事と存じます／いろ／＼と御
深切に／難有銚屋さんの／張込と申事だけわ／伺ふておりましたが

此かたが／どんな方やらわかり／ませんで／した／扱私し事／明廿九日から又々九州へ／巡業²⁶に参ります／十二月十五日頃／にわ帰阪いたします事と／思ふております／来春からは清六殿も／いよく病氣全快出勤²⁷／いたす事に相成ました／御帰阪相成ましたせつ／にわ／又／御目ニかゝり万々／追々と御寒く相成升る／ゆへ御身御大切に／先は御礼旁々／御不沙汰御わび迄／早々十一月廿八日 金杉／拜
鴻池様

●書簡番号9 昭和十二年二月二十八日付け

【封筒表】

〔宛名〕 東京市目黒区緑ヶ丘／三三一六公家様御方／鴻池幸武様／侍史

〔消印〕 □□1231／前812 〔切手〕 三銭一枚

〔貼り紙〕 「誠忠義士銘々伝放／送²⁸の問合せの／返事」

【封筒裏】 「封二月廿八日」

〔差出人〕 「豊竹古鞆太夫」角印

※本書簡には、鴻池幸武筆によると思われる注記が、本文の前に記されている。文面は以下の通り。

註／昭和十二年二月廿五日夜（八時五十分より／九時半まで）

／大阪放送局にて古鞆太夫、清六／にて誠忠義士銘々伝 勘
平切腹／を放送したるに就き問合せ、し／時の返事也 幸

武認

※また、新聞記事の切り抜きが添付されている。記事の見出しは

「古鞆太夫が語る『勘平切腹の段』／KB」。原田真澄の調査により、「大阪日日新聞」昭和十二年一月二十五日夕刊と判明した。

【本文】

前略／御機嫌御宜敷何よりと存じ上／昨日は御たより被下難有／御礼を申上ます／つまらぬものを御聞下さい／まして／実は三十八分間の時間より／御ざいませんで元来が私しは／人さんの様に抜飛して／一段に／まとめて其時間に合せて／語ると申事がいやで御ざい／升ので／種々考へましてふと思ひ／出して三十年以上も語つた／事のない彼段をやつて／みましたのでさだめし／御耳けがして／御ざりました事／と／存じます／亀之助さんと申方は／三代目長門太夫さんの／修行中から弾いて居ら／れた／と申中々の方で御ざります／又三左衛門邸と申し／ますは／廓景色雪之茶会と／申ます院本に御ざります／かやの村の段と申所で／夫を／銘々伝の中に差入てやり／ました物で私しが／放送致しましたのとわ／違ひます／昨日番附を御送りいたしました五ヶ年振りで寿しやを²⁹／文楽で語ります来月御帰／阪に相成ます事で／御ざりましたら／一度御來場を願度存じ／ます／何れ御目にかゝり／まして万々／先は御不沙汰御わび旁々／御返事まで
二月廿八日 古鞆／拜
若旦那様／侍史

●書簡番号10 昭和十二年六月三十日付け

【封筒表】

〔宛名〕 東京市目黒区緑ヶ丘／千鳥阪公家様御方／鴻池幸武様

／侍史

【消印】住吉／12.6.30／后4-8【切手】四銭一枚

【貼り紙】「平信」

【封筒裏】「封六月三十日」

「差出人」「金杉弥太郎」角印

【本文】

前略／東上中は種々御配慮／に預り難有御礼申上／扱御手紙をみたゞき／当方より／帰宅直様御たよりを／申上／はづ廿二日より又々発熱／床に／着漸々本日気分も少し／ましに成ましたので／御礼やら／御手紙の御返事やら申あげ／ます／そんな事で御申附の件も／いまだ手につかづにありますが／明後日あたりからぼつ／ぼつ／やらしていたゞきますつもり／しております今暫くの間を／お待願上ます／いづれ御帰邸に相成ました／せつに万々／申あげたいと／存じ升／梅雨の事に／御ざります／此上共に／御身御大事に／今日は是で失礼を／いたします

六月三十日 古鞞／拝

若旦那様

●書簡番号11 昭和十二年十月一日付け

【封筒表】

【宛名】東京市目黒区緑ヶ丘／公家様御方／鴻池幸武様／侍史

【消印】住吉／12.10.1／后4-8【切手】四銭一枚

【貼り紙】「明治初年／越太夫の事」

【封筒裏】「封十月一日」

「朱印角」「金杉弥太郎」角印

【本文】

好時候に相成まして御座り升／益々御機嫌のお宜敷き由／何よりと存じあげます／扱申様のない御不沙汰を／致しまして実におわびの／申様が御ざりませぬ何卒／御勘弁の程御願申上／本夏は何方へもませづ／宅にへばりついでございました／表もうらも日々万歳／／の声ばかりを／き、まして／たまに此頃も名古屋より／豊はし岡ざきへ興行に／参りましたが商ばいと申せ／気がさしましてやつて／居られませぬ何んとか／早く／戦争の都合よく納まつて／いたゞきたる事に御ざいます／本月もまた休みに御ざります／御帰邸相成ました節にわ／御来遊下さいます事を／御ねがい申て／おきます／明治初年の越太夫師は／立派な立者で／三代重太夫より五代竹本政太夫に／なられました師の門人で文政／十一年よりの太夫で始め雛太夫と／申後に眞喜太夫と改名致し／后に再改名越太夫となられて／明治三年頃に文楽軒／芝居へ出勤致されました／事と存じます此次の／越太夫さんわ彦六座時代に／是も雛太夫から改められ／後に五代目住太夫に／なられました／方であります／御尋ねの越太夫師は三代目／ではないかと思ひますまだ／しかと／調べて見ませぬか死去わ／明治十三年庚辰九月廿一日／法名徳譽浄光禪定門／と御ざいます

明治三年五月文楽軒稲荷芝居に／久々出席／夏祭浪花鑑道具屋ノ切

同七月（忠臣蔵勘平腹切ノ段／七ツ目掛合平石衛門

同九月狭間合戦駒木山砦ノ切

同十一月布引瀧二段目ノ切

明治四年正月（信仰記花子ノ段ノ三段目ノ中

同三月玉藻前道春館ノ切ノ此興行五月七日迄

同八月ノ伊賀越伝授場と相合傘

同九月ノ鬼一法眼四ノ切揚弓ノ興

同十一月彦山小栗栖村之切ノ是にて松島へ移転

明治五年五月ノ松島新築始めて文楽座と座名をノ櫓に上る稲荷時代

は文楽軒ノ之芝居と申ました

正月興行太功記杉の森ノ切

同三月大江山綱屋敷ノ切

同五月覽仇討九十九邸ノ切

同七月八犬伝角太郎庵室ノノ切

同九月朝貞嘶摩耶ヶ嶽ノ切

同十一月三日太平記嘉平治住家ノノ切

明治六年正月休カ十一月の出場をノ初春へ持越興行カ番附ナシ

同二月ノ千本桜渡海屋ノ切

同四月先代萩殖生村ノ切

同六月三代記長曾我部住家ノ切

同八月京都行

同九月忠臣蔵四段目ノ切

同十一月安達原四ノ切一ツ家

明治七年正月ナシ京都行

二月狭間合戦壬生村ノ切

四月八陣毒酒ノ切

六月盛衰記さかろノ切

九月玉藻前四ノ切梅壺

十一月彦山毛谷村ノ切ノ是にて文楽座を退座せられ

同八年二月に道頓堀角の芝居ノにて大和錦朝日旗揚の時ノ五條役所

の段切を勤められノ其後は折々各所へ趣き出勤のノ後死去致されま

したよしノ此方の通称を藤島屋ノ吉太郎と申されましたノさてせ

ん申あげました通りノ本月も私しわ休みでノ今一月から京都の弥栄

ノ会館と申て祇園町へノできました所を松竹のノ経営となり夫へ七

日ばかりノ鍛大隅文字相生呂ノ伊達各氏と人形全部ノ参りまして又

十日頃からノ北新地演舞場へもノ六日間斗りノやる事になつており

ます由にノ御ざりますノどうもいつ迎もぞんざいなノ手紙の書よふ

にてノまことにノ相すみませぬがノ御はんじお読み下しノ願上

升ノ余わ又御面会をノ願ひましてノ万々ノ先は乍延引ノ御不沙汰御

わび旁々ノ右御返事迄

十月一日 古鞞ノ拜

鴻池幸武様ノ侍史

●書簡番号12 昭和十二年十月十二日付け

【封筒表】

〔宛名〕 東京市目黒区緑ヶ丘ノ公家様御方ノ鴻池幸武様ノ侍史

〔消印〕 住吉ノ12.10.12ノ后48〔切手〕 4銭と2銭

〔貼り紙〕 綱太夫ノ五代六代ノ事³³

【封筒裏】 封十月十二日

〔差出人〕 豊竹古鞞太夫ノ角印

【本文】

前略九日出の御たより正に／拝見益々御機嫌の由／何よりと存じ上
ます／扱綱太夫師の事を／御たづねに附五代六代を／鳥渡だけ書出
し／ました御らんを願上升／又中旬にわ御帰邸の由／御ひまがとれ
ましたれば／御遊びに御越下さいます／よふ先は御返事迄／早々
十月十二日／

五代目竹本綱太夫

始メ四世江戸堀綱太夫（先名二代目むら太夫）／通称近江屋吉兵衛
ト云フノ門人ニテ初名ヲ／竹本芝太夫ト呼ブ天保二卯年ヨリ之太夫
成／天保四年十月興行三国武及奴請状席中ノ／奥ヲ役附綱登太夫ト
改名夫ヨリ淡路座ニ寄り／修行後各所へ出勤天保十三年寅九月ノ北
新地芝居へ出座七代目竹本紋太夫ヲ此時／名乗ル同十四年卯ノ春初
代竹本對馬太夫／ト再々改名後年国名不相成迎差留之時／津嶋太夫
ト文字ヲ改メ出勤ス其後又／元ノ對馬ニカヘル撰津大掾師之師匠ノ
タル五世春太夫ト此對馬太夫ハ人氣ノ之競走ヲセラレシトノ事デ有
升ノ松葉屋廣助師猿糸時代之彈テ居ラ／レタ太夫サンデ有升又現今
重造君之／祖爺初代重藏師之永ラク相手方ヲ勤／メラレタ事モ有マ
ス其コンビ時代ニ面白ノ話題ガ残ツテ有升地口合ノアンドウニ／重
藏對馬ハ左右ニ肩ゲト／／云フノガ秀逸有リマシタ由是ハ十八番ノ
物ノ花上野蒼石碑志渡寺ノ段ノ奥デ／重造數馬兩人ガ坊太郎ト立合
所ノ／文句ニ重造數馬ハ左右ニ別レト云フ文ノ章ガ有リマシテ又對
馬大夫師ハ右ノ方ニ／頭ヲ肩向ケルケセ又重藏師ハ左ノ方ニ／頭ヲ
肩向ケルケセガ有升タノデそこで／重造つしまは左右ニかたげノ扱
前ニ戻リマシテ／對馬大夫師ハ至ル所好人氣デ横堀新築地ノ座間社

内御靈芝居ト云ニ出勤後ニ／明治初年京都ニ住居セラレ公家方ニ／

御出入去御家ノ家来ト成名ヲ瓜生ノ隼人ト呼デ二本差デ歩行セラレ
マシタトノコト／夫ヨリ師匠タル四代目江戸ニテ死去後綱太夫ノ其
俣ト成テ有リマシタノデ京都ニ追テ明治ノ元年ニ五代目名跡ヲ襲名
セラレマシテ／近江源氏先陣館盛綱首実檢之段ヲ／襲名披露ニ語ツ
テ居ラレマス番附ガ御ノ座リ升ガ年号ガ不明デハ有升ナレ共ノ／明
治元年カ又ハ二年カト思イマス是ニハ又々ノヨリ調ベマシテ此時ノ
三味線ハ野澤吉彌ノ後ニ五代目吉兵衛師デ有升ノ綱太夫系デハ瓜生
綱太夫トカ又ハ／隼人綱太夫トカ申テ居升ノ代々ノ墓地モ法名モ年
号モ皆々調ベテノ有升ガ此五代ダケノ法名モ墓地モ不明ノデ有升尤
モ京都ノ西陣辺デ後年ノニハ風呂屋ヲシテ居ラレタ事ダケハ分ツテ
／有升ルガ寺モ墓モイマダニワカリマセヌ

初代綱太夫ハ新路次平野屋嘉助ノト云フ

二代ハ京猪之熊ト云フ

三代ハ鉛屋ト云フ

四代ハ江戸堀ト云フ

五代ハ瓜生ト云フ

六代ハ左官ノ綱太夫ト云フ

七代ハ法善寺ト云フノ

六代目竹本綱太夫

始メ三世河堀口長門太夫嘉永四年頃江戸ノ逗留中之門人ニテ小定太
夫ト名乗り同六年ノ阪地ニ来リ暫時ニシテ江戸ニ歸リ大夫ヲ止テ我
ノ本業成左官職ト成又々浄瑠璃道ニ入りテノ岡太夫之門ニ入テ豊竹
鍛太夫ヲ名乗り前語りヲノナシシ熟シテ后西京ニ来リテ山城掾之

門人ト成ノ殿母太夫ト改ム此頃元治元年頃同二年二月ノ京四条南芝居ヘ出勤追々評判宜敷堺ノ芝居ノニテ先代萩竹之間ヲ語り好人気各所ヘ出勤其後ノ京都ニ戻ツテ竹本織太夫ト再改名ス明治五年ノ大阪ヘ下リ北堀江芝居ニテ忠臣蔵掛合九太夫トノ桃ノ井別荘ノ段（現今本造下邸）是ヲ勤メ好評ノ夫ヨリ益々好人気或時新町封印切ヲ語ルノ時ナドハ其気分ヲ取入レル迪其興行中或ノ茶屋ニ入ビタリニテ彼家ヨリ日々芝居ヘ出勤ノ致サレシ由此師ニ附テハ種々成蹊残リアリノ明治九年九月興行大江橋々畔小家ノニテ夏祭浪花鑑田島町団七内ノ段ニテノ六世綱太夫名跡襲名披露ヲ致サレ後ノ各所ヘ出勤夫ヨリ御手紙ニ有升道頓堀ノヘ出座千本桜の春古鞆綱ノ掛合ノ狐ほかされの所で荒法師が歌をノうたう此時綱太夫師が紀伊の国をうたゐノましてから色里各廓で紀伊の国がノ大流行致しましたとの事を師匠の宅ノノ御かみさんからよく御申しを聞きましたノ其後又々江戸表ヘ帰ヘラレ又明治十一年之ノ十月ニ帰阪有テ堀江芝居ヘ出勤八陣之舟ノノ政清ト八ツ目切本城ノ段ヲ勤メラレ直ニ又大江橋ノ小家ヘ出勤此時ハ一ノ谷ノ二ノ切流し之枝ノだんとノ三ノ切陣家ノ段トヲ語ラレマシタ夫カラ各所ヘ出勤ノ全十二年卯十一月稲荷北門席ニテ菅原寺子ヤノノ切ヲ勤メテ又々東京表ヘ帰ヘラレマシタノ東京ニテモ各座并ニ席ヘ出勤セラレテ好人氣ヲノトツテ居ラレマシタガ明治十六年癸未年九月廿四日ノ行年四十三ニテ歿セラレマシタノ法名竹蘭印綱譽業徳義本居士ノ川崎之大師本堂向テ左側之大ナル松ノ木ノノ元ニ同師之碑ガ建テ居リマスノノ綱太夫系之内で此師ヲ左官ノ綱太夫ト申升ノ俗名斉藤太夫

古鞆ノ拝

鴻池様ノ御侍史

●書簡番号13 昭和十三年五月十日付け

【封筒表】

【宛名】 東京市目黒区緑ヶ丘三三一六ノ公家様御方ノ鴻池幸武様ノ御侍史

【消印】 住吉ノ13510ノ后4+8ノ「切手」四銭一枚

【貼り紙】 「織大夫改名祝の事」ノ及堺春大夫の墓ノ所修理の事」

【封筒裏】 「五月十日」

【差出人】 「金杉弥太郎」角印

【本文】

前略御免被下ノ八日出の御尊書正に拝見ノ難有且又実に御無理ノなる事を御願申上ノましたノ所御聞濟下さいましてノ何共ノ御礼の申様が御座りませぬノ厚くノ御礼を申のべ升ノ昨日織太夫より申参りノましたには此度ノ改名に附見台をノ御祝下されましたとの事ノ何んと申結構な事ノであらうふ私がノ頂戴致しましたる如きよりの嬉しき重々御厚礼ノ申上ます又ノむさくろしきノ宅迄御使者をノ下さいノました事をノ実に本人より母姉ノともに難有事に思ひノよるこんでおりますノ此上共に未長くノ可愛ノがつてノやつていたゞきますよふ私しよりもノ御願ひ申上ノ扱又御地の御墓の事ノさだめしおこまりの事とノ御さつしノいたします不明な方がノ多くノある事と思ひますノ堺林昌寺春太夫師の墓ノ事は叶太夫方ヘも手紙をノだしまして只今文字ノ太夫ト断しをノいたしてノおりますノ何れ近日に何とかいたしノまするノつもりでノおり升ノち

かくに御帰邸との事／何れ御面会を願ひまして／万々／昨夜織太夫³⁷送御聞き／下さいました事と存じます／先は御礼まで
五月十日 古靱／拝
鴻池幸武様／御侍史

●書簡番号 14 昭和十三年六月十九日付け

【封筒表】

【宛名】市内東区今橋／鴻池御本邸にて／鴻池幸武様／御侍史

【消印】大阪南／13.6.19／后0-4 【切手】四銭一枚

【貼り紙】「平信」

【封筒裏】「封六月十九日」

【差出人】「豊竹古靱太夫」角印

【本文】

前略御免／只今は御使難有／たしかに番附帖／六冊ゐたゞきました
／稻荷座之分今一冊／御手元に残りあり／ますと／存じますが未だ
御入用／なれば宜敷御調済／に相成おります事なれば／御都合の時
又／御とゞけ／願上升自分用を／先きに申上まして／失礼／扱御
無事御帰邸の御事／おいそがしき中を写真／何角と御厄介成事と／
厚く御礼申上升／昨日堺春太夫師の御墓を／もと／に建直しいた
し／まする事に漸と林昌寺へ／叶太夫文字大夫と私しと／参りまし
て住職と嘶しを／いたしてまゐりました／何れ近き内に建てくれる
／事と存じます／又新橋演舞場行も／昨日極りました様な事で／何
角いそがしく織太夫は／明日東上いたし私わ／廿四五日頃に参り度
と／考へ／おります／有楽座へ参りました／頃³⁸の番附は調べて／見

まするが是はあるまいと／存じます又米澤町／時代の番附も取調べ
まして／有りまするものは東京へ／持つて参りませふ／何れ東上の
節御目に／かゝり万々／先は御礼旁々／御返事迄
六月十九日 古靱／拝
鴻池幸武様／御侍史

●書簡番号 15 昭和十三年十月二日付け

【封筒表】

【宛名】東京市目黒区緑ヶ丘二式一六／公家様御方／鴻池幸武
様／侍史

【消印】住吉／13.10.2／后0-4 【切手】二銭二枚

【貼り紙】「三代目吉田辰五郎及／兵吉、小兵吉の事」

【封筒裏】「メ十月二日」

【差出人】「豊竹古靱太夫」角印

【本文】

御尊書に預り難有少しく／御涼しく相成ましたと思ひ／ましたらば
此両三日は／又／むしあつく／なつて参りましたが是は／お長い
事も御座りますまい／また／くさむい／くと／申升る事もちかい事
に／御座りませふ／益々御機嫌御宜敷／由何よりと存じおり升／長
い間の／休みに御座りましたがいよ／久振りにて文楽も開場と
／相成ました番附が出来／ました／御笑覧願上升／明治座³⁹へも御越
下さい／ましたとの事／厚く御礼申上升／何んでも御客様さへ来て
／いたゞけばよろしいので／不入ではこまるので／御ざいます／お
蔭にて大入満員も／四五日です／したので／是もみなさまのお蔭

と／かげ／ながらよろこびおり／ました／洋行の噂も如何相成／ました事やら其後何物も／聞ませぬしかしこんな時／にわ白井様も御考へ／下されて何んとかやつて／下さるとよいと思ひます／又日本人でもわからぬ物を／とか新聞に出ておりましたが／わからぬ物わいづくへ／まゐつても／あるものです又わかる方も／あるのです御帰阪に相成まして御目に／か、り万々御嘶し申上度と／思ひおり

又辰五郎さんの事／初代二代わおわかりに／なつてある事と存じます

三代は二代目吉川才治の／門人にて初名を小市改めて／才三郎再改三代目辰五郎／名跡襲名して各座へ出勤／後に彦六座の大立者

四代目辰五郎は此間死去／致ました人はじめは／兵造と申ました夫から／駒十郎に成つて後に／四代目を襲名／此人は始め四代目兵吉の／門人で兵造と名乗つて／師死去後三代辰五郎の門に／成て駒十郎と改名して／後に師名辰五郎になつたと／思ひます

兵吉名跡は四代兵吉のやはり／弟子で辨吉と申後に／二代目之小兵吉になりまして／師亡後五世兵吉を襲名／此人も彦六座にも出勤／又文楽にも長くつとめて／おりました只今の小兵吉／の師匠であります

追々とおさむく相成／升るゆへ此上共に／御身御大事に／いづれ御面会を願ひ／万々

十月二日 古鞞／拝
鴻池様

●書簡番号16 昭和十三年十二月十九日付け

【封筒表】

【宛名】東京市目黒区緑ヶ丘三三／一六公家様御方／鴻池幸武様／御侍史

【消印】熱海／13.12.20／前8-12 「切手」四錢一枚

【貼り紙】「平信」

【封筒裏】「糊十二月十九日」

【差出人】「豊竹古鞞太夫」角印

【本文】

前略年内も少々日と／相成まして御座ります／扱毎度おたより且写真／まで／御送り下さいまして難有／御礼申上り御礼延引／あしからず／扱采春興行も元且より／又々忠臣蔵道行の真と／九段目前半段駒鏝の一日替り奥は大隅に／御座り升次は日向島を／津夫から又の勸進帳／弁慶富樫織と相生／一日替り其次が三十三間堂／中文字切は又私し／夫から団子売で閉場と／申よふな／いつも／の／事に御ざり／ます／私の／九段目との御手紙については／御目にか、りました節万々／御嘶しを申上度／ぞんじ／ます／いづれ春に／御めにか、りまして／宜敷／御越年を御祈申上り／年内は是にて失礼申ます／先は乍延引／御礼迄

十二月十九日 金杉

鴻池幸武様／御侍史

●書簡番号17 昭和十四年二月四日付け

【封筒表】

〔宛名〕東京市目黒区緑ヶ丘／公家様御方／鴻池幸武様／御侍
史

〔消印〕東山／14.24／后48 〔切手〕二銭二枚

〔貼り紙〕「冥途の飛脚／放送の事」⁽¹⁷⁾

〔封筒裏〕「封二月四日」

〔差出人〕「京都四條川端下ル／招福方／金杉弥太郎拜」

〔本文〕

前略／扱函三日前におたよりを／いたしました時今本月八日に／放送の事を鳥渡／申上したが／延期をいたしましたゆへ／右とりけし申します／近々御慶事の／あるべきに／外題の冥途の飛脚が／面白くなく外のものと／かへて／くれと申参りましたが／自分も／廿四五年振りに／語つて／みよふと／思ひおりましたが／鳥渡氣が抜まし／た／から／やめまして又後／／／事にして頂きました／あまり早くから御しらせ／いたし／ましたらば／やめる事に／相成ました／とりけし／／お蔭にて京都南座も／大入をつゞけております／先は右やめました／御報迄

二月四日 古鞞／拜

鴻池幸武様

三月下旬に／御地へ参る事に極まりましたが／早くから申上て是も又替るやも／しれませぬ

●書簡番号 18 昭和十四年四月七日付け

〔封筒表〕

〔宛名〕市内東区今橋二丁目／鴻池幸武様／御侍史

〔消印〕住吉／14.24／后48 〔切手〕四銭一枚

〔貼り紙〕「竹本文字太夫の／代々の事」

〔封筒裏〕「寿四月八日」

〔宛名〕「金杉弥太郎」角印

〔本文〕

前略／昨日は御不礼を致しました／扱御申附に相成ました文字／太夫之代々あらかたわ／こんな事になつて御座いまし／て本人も七代目でやつて／おり升るが昨日も申ました通り／東京にも一人文字太夫が／おりましたが此人は東京／だけの文字太夫で代数の中へは／はいつておりませぬ／氏太夫師と重太夫より／六世政太夫となられました師との／御墓をともしるして／おきました何れ又々御たよりを／申上する今日は／是で失礼を／申あげます

四月八日 古鞞／拜

鴻池若様

御女申様へも宜敷御鶴声を／／文字太夫歴代

初代ハ越前少掾之（東ノ元祖）門人ニテ大和屋茂兵衛／ト云フ初代ハ豊竹文字大夫ヲ名乗ル／延享二年越前之一世一代興行ヲ終リ同年八月／ヨリ西之竹本芝居へ出勤此時ヨリ竹本改性ス

○ 二代ハ二世組大夫之門人ニテ後三三代目組大夫ヲ／襲名セリ

○ 三代ハ三世綱大夫（飴屋）之門人ニテ後二／三世竹本氏太夫ト成

四代ハ同氏大夫之門人ニテ初名さの太夫ト云フ／後ニ四世文字太夫師名襲名シ後年堺之四世／春太夫之養子ト成天保十三年寅十一月堺新地ノ南芝居ニ於テ五世竹本春太夫名跡相續ス此時／撰州合邦ケ辻下ノ巻役場

○ 五代ハ四世豊竹岡太夫之門人始メ百合大夫ト／云フ／師岡太夫江戸へ下リシニ付五世春太夫之預リ門人ト成／／春太夫先名文字太夫ヲ襲名シ五代目トナル／後ニ旧師名跡ヲ襲イ五世岡太夫ト成

○ 六代ハ二世越路大夫之門人（撰津大掾）ニテ／始メ常子太夫後さの太夫再改名／六代目文字太夫ト成明治卅六年一月ニ／師名竹本越路大夫三代目ヲ襲名ス

○ 七代ハ三世越路太夫之高弟始メ小常太夫／次ニ師之幼名常子太夫ト成夫ヨリ八十大夫／七世ヲ襲名シ師死去后之大正十四年／十一月五代之文字太夫三十三回忌ニ相当／此時師之先名竹本文字太夫之七代目ヲ襲名／ス是当今之文字太夫／／

○ 三代目竹本氏大夫三代目／文字太夫改／法名（妙法）眞諦院我樂日淨信士／弘化四丁未年十一月廿五日行年五十八／中寺町高津表門筋南へ入東側／妙堯寺ニ石碑有／五代目竹本春太夫之師匠也／大系図ヲ見レバ四代目氏太夫ニナリマスガ如何／仲間デハ三代目ト申テヲリマス／鉛屋綱太夫ノ門人ニテ文政十二年正月／堀江市之側芝居興行之時伊賀越沼津／之段ヲ語り改名披露アル此時三十九才

○ 四代目竹本重太夫先名六代目むら太夫改／森見院法譽重翁憲禪定門

／明治十九年八月五日行年六十二／天王寺生玉町長圓寺ニ石碑有／寺門ヲ入りテ直北側ニ東面ナセシ碑／六代目竹本政太夫トアル芝居ニテ披露／ナク名跡ヲ相續シ直死去セリ俗名森近藏

●書簡番号19 昭和十四年四月二十五日付け

【封筒表】

【宛名】市内東区今橋式丁目／鴻池御本邸／鴻池幸武様／侍史

【消印】住吉／14.4.25／前8-12 【切手】四銭

【貼り紙】「平信」

【封筒裏】「寿四月二拾五日」

【差出人】「金杉弥太郎」角印

【本文】

前略其後御不沙汰／御赦願度只今／巡業より帰宅致し／先日御送り下さいました／御手紙拝見御返事／延引あしからず／三日初日⁽⁵⁰⁾にて菅原／道行より杖折檻（文字／呂／一日替り／東天紅大隅 道明寺津／寺入伊勢 寺子屋古戦

○ 朝貞宿屋口 笑葉と／切を／（鏝／駒／一日替り／大井川伊達

○ 弥治喜多並木掛合／相生織弥二郎兵衛喜多八一日替り／外私しは／道明寺に廻りたいの／でしたが／四段目の方をと申参り／ました／おかげさまで此度の旅も⁽⁵¹⁾／各地共都合よく／まゐりましたが／岐阜一日富山一日高岡一日／加賀金沢二日福井一日と／申す乗込く／の初日／十八日に立まして直に岐阜へ／昨夜福井を打上直／午後十一

時半の／発車に打のり今朝五時半に／大阪駅へ着いたし／ました／よふな／せわしなる旅行美に／いやになります／浄瑠璃もまんそく／にわ／語れませぬ／右様の次第にて宅から／書面も送らします／事ができませず夫れが／為／御返事延引何卒／あしからず御ゆるしを／願上舛／先は乍延引御返事迄

四月廿五日朝 古靱／拝
鴻池幸武様

●書簡番号20 昭和十四年十二月二十三日付け

【封筒表】

【宛名】市内東区今橋式丁目／鴻池様御本邸／鴻池幸武様／侍史

【消印】住吉／14.12.24／前8-12 「切手」二錢二枚

【封筒裏】「メ十二月廿三日」

【差出人】「大阪市西成区粉浜中ノ町／四丁目一三六／金杉弥太郎／拝」

【本文】

前文御免／二十日出の御書面難有／拝見仕りました御深切に／御招待下さいまして当方は／いつにても結構に御ざり／ます／しかし／其当日迄に是非一度／御目にかゝり申上度／事も／御座ります／が御ひまは／御ざります／まいか御伺／申上度／私も／明廿四日は宅にて／陣家の／けいこをいたして／おります／が／明後廿五日は例の／因会に出席いたし／ますので／是は一日がけと／相成ます／此日は／一日留主／廿六日より廿八日迄はどこへも／参りませぬ／廿九日

は立稽古三十日は／惣げいこと相成ます／織太夫團六にも今日鳥渡／申付たれば是非御とも／いたし度と申ておりました／が／是迎も文楽外に中座の／大蛇退治のけいこが／で、まゐり／ますので此人らは十二時の／おひる飯が／結構と申ておりました／東京表へ先日私し／おたよりを申画の御札を／さし出しましたが／あなた様の御たよりと入違へに／相成ました事と存じます／いづれ御面会を願ひまして／万々／先は御札旁々／先きに一度御目に／か、れませふか／右御願迄

十二月廿三日／古靱／拝

鴻池幸武様／侍史

●書簡番号21 昭和十五年一月二十八日付け

【封筒表】

【宛名】東京市目黒区緑ヶ丘三三二六／公家様御方／鴻池幸武様／侍史

【消印】住吉／15.1.29／前0-8 「切手」二錢二枚

【封筒裏】「メ一月廿八日」

【差出人】「大阪市西成区粉浜中ノ町四丁目一三六／豊竹古靱夫／電話住吉三二四五番」印

【本文】

御機嫌お宜敷御座りますか何んと／お寒ひ事にては御ざいませぬか先頃は／文楽にてはなはだ御不礼を仕りました／とう／く熊谷陣家は風引で終つて／仕まゐまして実に残念に御ざいました／お蔭様にてからだも元々通りに相成まして／昨日から二月の紙屋の治兵衛さ

んを／稽古にかゝりましたどうも此淨瑠璃わ／おしやべりをして見
ましても私の語れる／義太夫と違ふよふに思ひ升どふしても／語
れませぬ十八日間の興行中せめて／一日でもよい少し自分の思ふて
居るよふに／やつて見たあとと思ひますが此段は古鞆／にわ語れぬ一
段と見へます／扱此頃逢阪の四世廣助師の墓所へ／御まゐり申て参
りましたまだ松葉家に／あひませんが文楽の稽古に会ひましたら／
いうてあげませふと思ふております／先日御預致しました名跡拔萃
ぼち／と／調べかけておりますおしるしの相違の所を／こゝへ
書出して見ますと

住太夫四人ト有り升るが雛太夫改越太夫改／五代目住太夫が御座い
升／天王寺ニ墓ノアル人

紋太夫ハ九代目迄御座ります

津賀大夫ハ先達御調濟之濱太夫改四世からアト／東京ノ小組太夫改
和佐太夫再改五代目津賀大夫／此人ハ阪地ノ産レ／先ノ／古鞆師の
門人／でした／此方ハ中々上手ナ小サイ浄ルリデシタガ味イ方／デ
シタ其弟子ガ現今六代目津賀太夫事／御地之米翁デ有マシテ名跡ハ
当時私ガ／預リ阪地へ持帰ヘツテヲリ升カラ六代迄ハ／アル事ニナ
ツテヲリマス次ニ此名ヲ継ク者ニハ／七代目ト名乗ラセマス

湊太夫／（四人ノトアリ升ガ）／天王寺ニアル墓ノ方ガ五代目デ有
升テ／此頃御地デ死去致シマシタさの太夫改／湊太夫ガ六代目ヲ継
テヲリマスカラ／是モ六代迄ニナリ升

八重太夫／（七人）／是モ八代目迄継デヲリマス／橘太夫改八代目
竹本八重太夫／此人ハ早クカラ朝鮮へ稽古ニ／渡ツテ居マシタ／朝
鮮ノ大掾サンノ様ニ申サレテイマシタ／余上手デハ有リマセン／／

巴太夫／（五人）／阪地デハ例之柳適太夫ガ五代目ノ／巴太夫デ有
マシテ次ニ六代目ガ／出来テヲリマス要太夫改巴太夫ト／申ノガ六
世ヲ継デヲリ升／此頃ハ御地ニ巴太夫ガ出来テ／居升ガ現今ノ人ヨ
リ先キニモ／有マシテ夫レヲツイデ居ルノダ／ソウデスガ大阪デハ
見トメマセン／阪地次ニ巴太夫ガ出来升レバ／七代目トナリマス

播磨太夫ハ／初代ガ塩町政太夫江戶ニテ播磨太夫ト改名／此方ヲ初
代トシニ世蟻鳳播磨ト申テ／始メ伊左衛門ト云フ三弦ニテ後ニ三代
目蟻鳳ト成／我レノ弦クベキ大夫ナシ迪后年ニ二代之播磨太夫ト
成業ヲ替ヘ太夫トナル次ニ／越太夫改三代目播磨太夫と成次ハ／是
又元初代清六ノ門人ニテ亀太郎ト云フ／者后ニ亀鳳ト改ム此人元來
江戶生レニテ／稚キ時阪地ヘ至リ三弦修行シ江戶ヘ帰ヘル／又改名
紋左衛門ト成再々改メ伊左衛門／名跡襲名暫時ニシテ元ノ紋左衛門
ニ／カヘル中々ノ美音家ニテ明治十四年春ニ／大夫ニ成テ四世播
磨太夫ト改名ナス／此人明治卅六年夏頃死去代地ノ師匠ト通称／五
代目ハ是モ元三弦方ニテ京都ノ人／始メ仙之助ト云フ後ニ門造ト改
名後ニ／東京住人ト成テ後年ニ太夫ニ替リテ／四世之跡ヲ襲名五代
目播磨太夫ト成／次ニ此名跡ヲ継者ハ六代目也／古ヘノ播磨少掾
（二世義太夫）又ハ／播磨大掾（二代土佐太夫）外ニモ又／名護屋
播磨太夫ト申御人アレ共／此三師之名跡トハ別ニシテ三代目塩町政
太夫／ヲ初代トナス名デアル

綾瀬太夫ハ二代目迄有テ／現今之相生太夫ガ此名跡ヲ相続スベキ／
人はヲ継グハ今度ハ三度目トナル／相生太夫モ只今ガ三代目デアリ
マス
重太夫四代目迄

初代重太夫ハ後ニ三世咲太夫トナル

二代——ハ後ニ四世染太夫トナル／／

三代——ハ後ニ五世政太夫トナル

四代——ハ始メ園太夫より阿蘇太夫／次ニ六代目むら太夫より／重

太夫四代ト改名死去ノ頃ニ／六世政太夫ヲ襲名／一度モ此名跡ニテ

ハ芝居／勤メズ死ス／墓ダケニ六代目政太夫トアル

梶太夫／（六人）

其他はおしるしの通りに拝見致しました

三味之方

文蔵六人トアリマスガ私ラノ知ツテ／居リマス文蔵師ヲ人皆四代目

サント申テヨリ／マシタガ夫カラ其弟子ノ鬼奴松カラ／鬼勇ニ成又

花助ニ改メ再改名勇造／ヲ襲名ナシ後ニ五代文蔵ヲ襲名後／亡シマ

シタ方ヲ存ジテヨリ升ガ其外ニハ／御ザイマセヌ

吉左衛門ハ三人／／

市太郎四人

勝右衛門四人

傳吉八人

廣作四人

吉彌八人

伊左衛門六人

勝治郎二人

又造五人

才治六人

綱造四人

権平三人

仙糸四人

叶四人

重造四人

大助三人

仙左衛門四人

源吉六人

清八一人

おしるしの外ニ三味線トシテハコウイウ名跡之人ハ／書テ頂ク方ガ

ヨイト思イマス／／

人形部ノ方

吉田文吾五人

〃 千四二人

〃 冠蔵二人

〃 辰五郎四人

〃 兵吉五人

〃 辰造三人

〃 新吾二人

〃 才治四人

〃 金四三人

〃 文五郎三人

〃 冠四四人

〃 玉助二人

〃 文三四人

ゝ 小兵吉四人

豊松傳七三人

全 国八三人

西川伊三郎五人

豊松清十郎三人

吉川才治二人／／

吉田三吾四人

人形の部おしるしの外に少し爰へ／書出して見ました／外題の方はまだ調べませぬがぼち／／やらして頂きます／太夫三弦人形もよ／くさがして／見ますませこせの乱筆でどふぞ／御赦願上升／御寒さ／もきびしき折柄何卒／此上共に御身御大事に／何れ御帰阪の上御目／にかゝりまして／万々なを／／調さして／ゐたゞきます

一月廿八日 古鞞／拝

鴻池幸武様／御元へ／／

四代目長登元四代實太夫明治十六年ニ改名／明治廿三年十月死

六代目中太夫元四代目佐賀太夫慶応元年ニ改名／明治廿年二月十九

日死行年七十六

五代目彌太夫元長子大夫明治元年ノ改名／明治卅九年十月三十日死

行年七十

二代目團平元初代丑之助初代弘化元年ノ改名／明治卅一年四月一日

死行年七十二

五代目廣助元二代猿糸明治三年ノ改名／明治卅七年二月十八日死行

年七十四

初代長鳳元初代長尾太夫事明治十六年ノ改名／明治十七年四月三日

死行年七十五

四代目住太夫元初代田喜太夫安政七年ノ改名／明治廿二年一月廿二

日死行年六十一

二代目越路元初代南部太夫後年之竹本撰津大掾／大正六年十月九日

死行年八十二

二代目大助元初代仙糸明治五年ノ改名／明治十八年十二月廿八日死

行年五十六

二代目叶元初代鶴太郎安政四年ノ改名六世／染大夫ノ悻也明治廿五

年十月五日死行年五十七

五代目駒太夫元初代富司太夫元治二年ノ改名／明治廿年七月十一日

死元ハ三國ト申素人也

二代目津嶋元初代塚太夫明治二年ノ改名／明治二十年頃死

三代目勢見元阿蘇太夫万延元年ノ改名／大正三年十一月二日死行年

九十六

初代豊造元萬吉弘化五年ノ改名／明治卅三年一月廿八日死行年七十

四代目才治元燕四慶応元年ノ改名後年竹沢権右衛門五世ト成／大正

十五年四月十三日死行年八十八

二代目久太夫元弘太夫嘉永七年ノ改名／明治十六年十月十三日死行

年不明

四代目浪太夫元種太夫安政七年ノ改名／明治二十年六月頃ノ死去行

年不明

八代目染太夫元始メ染子太夫改六世梶太夫ト成後明治十二年三月改

名／明治十七年六月十八日死行年四十一

五代目清七元三代目勝右衛門／明治卅四年十月十二日死行年七十四

／／
五代目岡太夫元五代文字太夫明治十三年ノ改名ノ明治廿六年ニ死行年不明

八代目内匠元増太夫より磯太夫明治十四年ノ改名ノ明治三十年頃ノ死去ト思フ行年不明

六代目時太夫元文歎ト申ス三味線弾中々大家也大夫トナリテノ明治三十八年八月十七日死行年七十六

六代目組太夫元京都素人名玉呉ト申スノ明治三十八年七月廿五日行年五十九

初代呂太夫ハラ／＼屋ト申素人名糸鳳改呂篤ト云フノ明治四十年三月三十日死行年六十四

四代目重太夫元六代目むら太夫明治七年ノ改名ノ明治十九年八月五日死行年六十二

六代目綱太夫元二代目織太夫ノ明治十六年九月廿四日死行年四十三八代目紋太夫元淀太夫京之太夫也ノ死去年月日行年不明

二代目津太夫元初代緑太夫後二七世竹本綱太夫ト改ムノ明治四十五年七月廿三日死行年七十四

初代綾瀬元初代相生太夫大阪ニテ素人名小勝江戸へ出テ修行スノ明治卅四年九月二日死行年六十九ノ改名セシハノ明治七年也

文教
時造

庄治郎
龜助ノ四人共ノ京之人

五代目吉兵衛元五代吉弥黒吉也明治十六年冬ノ改名ノ明治四十四年

二月廿二日東京ニテ死行年七十一

六代目吉彌元吉三郎通称淀屋橋トモちんば共云フノ中々名弾明治十六年冬改名明治十九年十二月四日死行年ノ三十三

六代目三二元六代傳吉明治十六年四月ノ改名ノ此人後年三二ヲ他へ譲リテ吉五郎ト成

二代目廣左衛門元兵吉より榮三郎ト成又明治十二年ノ改名ノ大正五年十一月七日死行年八十

五代目友治郎元三代傳吉元治元年ノ改名ノ明治廿八年八月四日死行年八十一

濱太夫改四代目竹本津賀太夫ハ明治十七年ノ春出版大番附ニ改名有死去ハ明治廿三年十月十日ノ函館ニテ法名好學調音信士俗名塚本嘉吉ノ師匠ハ四代都むら大夫之門人にて後ニ山城掾の門下ト成初名

ノ美尾太夫ト名乗り後ニ竹本濱太夫を襲名なしノ又四世津賀太夫ト改名後年ニ函館で死す

下方ニ
竹本長尾太夫と有ハ二代目也東京にて豊嶋大夫と申す初代ノ門下大阪へ来りて二代名跡相続す始めハノ新町の高島座へ出座後松島文

楽座に入座ノ引続き御靈文楽座へ出動シ三段目切迄出世ノ明治廿六年十月廿九日行年五十才にて死す

長尾太夫ノ傍ニ有鶴澤豊吉ハ一時清水町團平師ノ養子と成られし京都ノ通称田村歌と申五世友次郎ノ師ノ門人にて始め友之助と名乘

り後ニ此二代長尾太夫ノ合ノ三味線となり阪地へ出座五代目豊吉を襲名其御人ノ有後年七世三二を相続す明治廿七年九月三十日死ノ

行年四十二当今の六世友次郎氏の手ほどきのノ御師匠さんまた近い

頃亡しました友之助の実父になり／ます

濱太夫改津賀太夫と並んで豊吉改傳吉と／有ますは田村歌の前の四代目豊吉改七代目／鶴澤傳吉此方は御靈文樂座に明治二十年頃／元太夫で有りし尼ヶ崎の琴声事豊竹綾太夫と名乗／出座す此時合三味線にて久々出勤あり暫時にて／休座明治三十三年二月三日死行年六十一

撰津師匠の越路太夫名跡を襲名せられしハ／万延元年十月の事であり廿五才ノ時又／春太夫ノ門人トなりしは安政五年にて同人廿二才ノ／頃でありし此時初めて太夫ト成南部太夫と／名を頂く

●書簡番号22 昭和十五年二月二日付け

【封筒表】

〔宛名〕 東京市目黒区緑ヶ丘／公家様御方／鴻池幸武様／侍史

〔消印〕 住吉／1523／后48 〔切手〕 四銭一枚

【封筒裏】「メ二月二日」

〔差出人〕「大阪市西成区粉濱中之町四丁目二三六／豊竹古鞆太夫／電話住吉三一四五番」印

【本文】

前略御免廿七日差出の御尊書と私からの／書面入違ひに入手正に拝見仕りました／外題書に朱にて——けて御座い／ますのはどういう事に相成ますのか／伺ひます／又松竹の白井氏⁵⁸に御面会相成升由／何角と御嘶の出ます事と存じます／どしくと文樂の事をよきに／つけ悪しきにつけて御嘶しおき／願上升／御墓の写真難有ふ御ぞいました／二三どなたの御墓か不明の物が御座り／ます何れ御目に

か、りました時御伺ひ／申上升／夫れから三十一日の御たより清十郎さんは／御存じの稲荷座と改座の時より久々／阪地へ出座せられました目の悪い方は／お、せの通り三代目と成ます

扱陣家の事はハリキリハルキン／の音に気をつける事と杉山先生の／本に出ておりますおかきに成ますなれば／顔を見合せてとか存じながらの所とおかきに／ならづにまぐらの文章の間に其音／づかいたゞよつていと申事が一ばんよい／かと存じます夫れにじゆんじて各所に／其風が見へるの方がよいと思ひます／相模は障子押開きなどの音が夫れと／存じます日も早西にかたむきしなど／の枕を考へますと皆夫れではないかと／もおもわれまます／是は三味線の事になりますすがたいがぬ／しかりちらされ是非なくもの跡に／チンテン夫から相模に顔をとります／津太夫君のを友治郎氏が弾きましたすが／いつも此チンテンを弾いております文樂／風と申升が大隅さんが団平師で語られ／ます方は此所（トーテン）と弾き升／是はトーテンの方が聞いていても／耳に此方がよいよふに思ひます／忠臣蔵九段目のはじめに／たすきはづして飛んで出る此跡に／チンテン昔のそふ者今のりん／こふいう所は此方がよいよふに聞へます／是が飛んで出るトーテンとやり升と／何んだかしかつべらしくなりまます／陣家の方はチンテンと弾くと／何んだかかわいよふに聞へ是はトーテンの方がよいこんな事も／鳥渡おかきになつて見ては／如何／存じながらの所もおせつよふに／思ひますがこふいう所も語る人に／よつて私しの語りますよふな音を／つかわぬ語り風も御ざいますから／余り節の事についてお書きなら／ず自分はそふ聞くとおかきに／なる方がよいのでは御ざりますまい

か

濱右衛門さんの御墓の事も難有ふ／御座りました元祖と彫つてあり
／ますだけに何だか年号とあわづ／さつぱりわからない事に相成
升な／昨日番附を御送りいたしました／伊藤老人と森下さんと昨日
二三時間／お遊びに見へましている／御はなしが／御座りました
／森下氏からおたよりが参りました事と／存じ升が小仙さん(63)を聞か
れるとの／お断でおかまらなくば拙宅にて／御聞きなつては如何と
お断し／申ておきました／何れ近日後帰阪と存じます其せつ／御目
にかゝりまして万々／毎度乱筆御ゆるし願上升／先は右御返事迄

二月二日 金杉

鴻池様／御元へ

●書簡番号23 昭和十五年五月三十日付け

【封筒裏】

〔宛名〕 東京市目黒区緑ヶ丘／公家様御方／鴻池幸武様／御侍
史

〔消印〕 住吉／15330／后48 「切手」四錢一枚

〔貼り紙〕 太郎助橋住太夫墓／及東海道筋先師／墓の事

【封筒裏】「封五月三十日」

〔宛名〕「金杉弥太郎」角印

【本文】

前略／五月廿五日出の御尊書／正に拝見仕りました／御返事延引は
実はお蔭様にて無事に披露の興行も廿二日にて千秋楽を告げ
ましたので織太夫／団六を連まして／紀州湯崎へ／参り廿九日に帰

宅／いたし／まして御たよりを拝見／乍延引難有御礼を申のべ升／
帰へりがけに／四代目竹本住太夫師の／田辺町会津ばし／西詰／西
方寺石碑へお参り／いたしまして写真を／とつてまゐりました
中々立派な御墓に御座ります／扱東海道筋の御墓は／鳥渡わかりか
ね升が／浜松にわ／正福寺と申す御寺に／元は竹澤龍造より／後に
豊竹和田太夫と／申て太夫になりました／方の石碑が御座ります
此方は中々立派な／三味さんで／御座りました太夫では／モウ一
つ／東京へ出られ／まして語つて／いられた私しも／兩三度／
伺ひました事も御座ります／同じ所に野澤八百蔵／竹本由良太夫
竹本春尾太夫と／申人の墓も御座りましたが／只今は如何に相成
ましたか／此三名の方はどんな／語りて弾手でありましたか／私し
は／ぞんじ／ません

又是は人柄が違ひ升るが／三州豊川稻荷へ参り升／途中牛久保駅と
申／所から二丁斗り／牛頭山大聖寺とか申升た／お寺の藪中に／今
川義元公の御墓が／御座りました／法名天澤寺殿四品前禮部／侍郎
秀峯哲公／辞世今川に流るゝものは／深草の名は山中に／残るよし
元

此御墓の傍に今川の臣／牛久保城主／一色刑部少輔之／石碑が／御
座り／ました

又同牛久保駅より五丁斗り／長谷寺に／山本勘助晴幸入道／道鬼法
師の／御墓が／御ざい升

岡崎駅より廿町斗り西／途中二白山橋と云ふ橋の傍に／徳川家康公
産湯の／井戸が御ざり升夫から／名高い／矢作橋を渡り三丁斗り／
兼高長者之邸跡と申す／誓願寺へはいり向ふて／右側に浄瑠璃御前

／の御墓が建つて御ざい升

本性院殿淨瑠璃姫／弘雲醫誓法女／寿永二癸卯年三月十二日薨す

此外に今一ヶ所淨瑠璃姫の墓所が有り升るが／是れわ今所を／さがし／ましたが不明しかし／同所にて御聞き下さい／ますれば直に
しれる／事と存じます

名古屋市にわ

四代五代の間に有(代数に不入)

江戸八十太夫事春太夫

五代土佐太夫事播磨翁

外にも御座いませふが／此お二人の／御寺も私しわ不明／名古屋へ

参り升かも／知れませぬゆへ其節／調べます

又七月一日から東京の／新橋演舞場へ久々で／参りますよふな嘶も

／ぼち／／やりかけて／おります

名古屋の春太夫墓のある／御寺の所書が出て参りましたが／是は古
き事ゆへ又御寺が／なくなつておりますかも／しれませぬ旅行中な
れば／茶屋町西へ行当り／無縁寺へ葬り石碑を／残すなりと書て／
御座います

天保元年九月廿日卒／松蔭自涼信士／俗名山田弥三兵衛／芸名竹本

春太夫／行年五十五

大阪北区天満西寺町／大林寺に同師の墓が／あります由是にわ／法
名は同じ年月日が／天保二年辛卯年五月廿日往生／と／彫つてあり
ます是れわ／大阪の門人中で／建てられたと思ひます

六月一日にわ津さんが／放送をいたします／そうで／此人わ忠臣蔵
九を／半段語るそふです／夫れに九日に私しへ／放送致すよふと申

て／参りました鳥渡考へて／おりますがとに角／四十五分と申ので
／全一段が／語れませぬゆへついで／ラジオはあつても失礼を／致
しまするが今度は何か／みじかい物をやつても／見よふかとも思ふ
て／おり升／やれば葛の葉狐別れ／でもやりますかな一方は／九段
目半段と申事で／すから私しわやれそふな／時間の物をやりたく／
思ひ升／如何なりますか／いづれ近日御面会の上／万々乍延引／右
御返事旁々／久々御伺迄
五月卅日 古鞆／拝
鴻池幸武様／御侍史

凡例一〔注〕〔演者名一覽〕〔作品名一覽〕

・【】数字に書簡番号、○数字に代数を示した。

・演者名の表記は典拠のままとし、()に改名履歴を補った。

・〔演者名一覽〕では、各名跡の歴代の人数を示すのみの演者
名については省略した。改名履歴は、代表的な名前のみ掲出
し、それ以外は省略した。

・〔作品名一覽〕では、曲名(段名)は省略し、作品名のみ掲
出した。

〔注〕

〔一〕

(1) 石割松太郎〔明治14〔1881〕—昭和11〔1936〕〕。

(2) ⑦市川中車〔安政7〔1860〕—昭和11〔1936〕〕。七代目中車は
昭和5年11月歌舞伎座の「仮名手本忠臣蔵」で薬師寺を演じている

舞台で倒れ、この10年10月歌舞伎座の「菊畑」の鬼一で久々の復帰を果たした。

[2]

(3) 大阪古典会の古書店、玉樹安造(香文房)カ。

(4) 『しのぶ佛』(昭和8年、鶴澤寛治郎事大盛千之助編輯兼発行人)。

(5) 『野澤の面影』(昭和9年、野澤勝平事加藤善一編輯兼発行人)。

(6) 『野澤のながれ』(昭和10年、鶴澤寛治郎事大盛千之助編輯兼発行人)。

(7) 昭和10年10月四ツ橋文楽座公演の古鞆大夫の役場(三味線④重造・ツレ⑥猿糸・胡弓仙三郎)。

(8) 未詳。

(9) 昭和10年11月9日午後七時半より、四ツ橋文楽座公演中継『仮名手本忠臣蔵』「早野勘平住家の段」(②古鞆大夫・⑥猿糸)を放送。

[3]

(10) 『近世邦楽年表 義大夫節之部』(昭和2年、東京音楽学校編纂、六合館)。

(11) 注(5) 前掲の『野澤の面影』。

(12) 『野澤の面影』の著者、①野沢勝平(↓②喜左衛門)。

[4]

(13) 古鞆大夫は、昭和11年4月名古屋・御園座公演を病気休演した後、6、7月四ツ橋文楽座、7、8月東京・歌舞伎座公演を休演。9月四ツ橋文楽座公演『須磨都源平躑躅』「五条橋の段」切(三味線④重造)から復帰している。

[5]

(14) 石割松太郎。鴻池幸武は、松太郎の通夜・葬儀にあたって、暉

峻康隆・山田二郎・猪飼叔蔵とともに会計委員をつとめた。

[6] (15) 石割松太郎夫人瀧子。

(16) 古鞆大夫は、昭和10年7月上旬の東京・明治座公演、11月四ツ橋文楽座公演に出演しているが、その間の巡業には不参加。

(17) 古鞆大夫は、昭和11年7、8月の東京・歌舞伎座公演には不参加。

(18) 8月9日に大阪南地の法善寺で石割松太郎追悼法会が行われた。

法会に引き続いて別室で追悼会があり、地唄「残月」(榎繁大檢校及同社中)、舞踊「菊の露」(新町木原豆奴)、浄瑠璃「桜丸切腹」(②つばめ大夫・③団二郎)が手向けられた。この頃、②豊竹つばめ大夫は文楽座を離れて、新義座として活動。三味線は⑥豊沢猿糸、

③竹沢団二郎が勤めている。鴻池幸武も参列、8月16日の高野山納骨にも猪飼叔蔵・盛田嘉徳・中村章景と、遺族の伴をしている。

(19) 採り評判記『音曲猿口轡』(脩暖堂蠶梁著、延享三年三月成立)。「日本庶民文化史料集成 第七卷 人形浄瑠璃」(一九七五年、藝能史研究会編)所収『音曲猿口轡』解題(土井順一)に拠れば、底本の祐田善雄氏筆写ノットは、石割松太郎旧蔵写本を転写したと思われる古鞆大夫所蔵写本を再転写したもの。

(20) 石割松太郎夫人から『音曲猿口轡』を借りる手配を頼むとの意カ。

(21) 昭和11年7月24日初日、東京・歌舞伎座における文楽公演。古鞆大夫は不参加。

[7]

(22) 『敵討稚文談』「百度平住家の段」。

(23) ⑥鶴沢友治郎カ。

[8]

(24) 未詳。昭和11年11月東京・歌舞伎座の三代目中村歌右衛門建碑記念興行及び展覧会に関連するか。

(25) 未詳。

(26) 古鞆大夫の役場は「寺子屋」切(三味線④重造)。

(27) 昭和10年6月博多・大博劇場公演から、11年12月四国九州巡業まで、古鞆大夫の三味線は、④鶴沢重造、⑥鶴沢猿糸が勤めている。

[9]

(28) 昭和12年2月25日にラジオ放送(三味線④清六)。同日の「読売新聞」朝刊に、「この浄るりは「仮名手本忠臣蔵」六段目を改作したもので(作者不詳、鶴澤亀之助節づけ)：(中略)：未だ文楽座にも上演されたことなく、古鞆大夫が卅余年前津葉芽太夫時代に東京の寄席で語つて以来といふ珍しいものである」とある。八世竹本綱大夫著『芸談かたつむり』(昭和41年、布井書房)「当代変り種の勘平切腹」に、古鞆大夫蔵本より書写した解説、床本収録。

(29) 昭和12年3月四ツ橋文楽座公演の古鞆大夫の役場(三味線④清六)。「五ヶ年振り」とあるが、前回、四ツ橋文楽座で語つたのは昭和8年4月公演(⑥友治郎)。この間、昭和8年7月東京劇場(⑥友治郎)、昭和10年6月福岡・大博劇場(④重造)、昭和10年12月名古屋・御園座(④重造)の三回「すし屋」を語っている。

[10]

(30) 古鞆大夫は、昭和12年6月上旬の東京・明治座公演に出演。役場は「松王首実検」切、「尼ヶ崎」切、「袖萩祭文」切、「扇屋より五条橋」切、「二月堂」切、「殿中刃傷」切で、三味線は④清六。

[11]

(31) 昭和12年9月名古屋・御園座公演の「堀川」切(三味線④清六)以外の演目未詳。

(32) 古鞆大夫は、昭和12年10月北陽演舞場、11月新町演舞場、12月北陽演舞場公演を休演。

[12]

(33) 八世竹本綱大夫著『でんでん虫』(昭和39年、布井書房)「綱大夫の代々」に綱大夫の代々についての記述あり。

[13]

(34) 昭和13年5月、②豊竹つばめ太夫改め④竹本織太夫襲名。同時に、③竹沢團二郎改め⑦竹沢團六襲名。

(35) ①竹本叶太夫。昭和2年退座、16年復座して⑦竹本春太夫襲名。

(36) ⑦竹本文字太夫。昭和16年⑥竹本住太夫襲名。

(37) 昭和13年5月9日、四ツ橋文楽座公演中継『ひらかな盛衰記』「松右衛門逆櫓の段」を放送(②つばめ太夫改め④織・③團二郎改め⑦團六)。

[14]

(38) 昭和13年7月東京・新橋演舞場公演。古鞆大夫の役場は、「弁慶上使」切、「堀川猿廻し」切、「長局」切等で、三味線は④清六。

(39) 昭和13年6月以前の古鞆大夫の東京・有楽座への出演は、大正5年7月、7年7月、8年7月、9年11月、10年7月、15年12月。

(40) 文楽座を離れて東京の寄席に出演していた明治24年春から26年6月頃カ。

[15]

(41) 昭和12年7月以降、13年5月迄、四ツ橋文楽座での文楽公演はなく、その間、北陽演舞場、新町演舞場で公演を行なっている。

(42) 昭和13年9月東京・明治座公演に古鞆大夫は不参加。

(43) 昭和13年9月9日付「読売新聞」夕刊記事「文楽が渡米する?」、同21日付「読売新聞」夕刊記事「文楽の渡米実現か」等に拠れば、この頃、アメリカで開催される万国博覧会での文楽公演の企画が持ち上がったが、経費その他の問題から実現しなかったらしい。

(44) 白井松次郎(明治10〔1877〕—昭和26〔1951〕)。

(45) 昭和14年正月四ツ橋文楽座公演。古鞆大夫の役場は、「三十三間堂棟由来」「平太郎住家の段」切(三味線④重造)。

(46) 古鞆大夫が「仮名手本忠臣蔵」九段目「山科閑居の段」切場を語った記録は見当たらない。

(47) 書簡中の記述によれば、昭和14年2月8日放送予定の「冥途の飛脚」は中止になったらしい。「廿四五年ぶり」とあるのは、大正9年9月御霊文楽座で語った「淡路町亀屋内の段」(三味線③清六)を指すか。

(48) 昭和14年3月2日の内親王誕生を指すか。

(49) 昭和14年2月京都・南座公演。古鞆大夫の役場は、「長局」切、「妹山(定高)」、「勘平腹切」切で、三味線は④重造。

(50) 昭和14年5月3日初日、四ツ橋文楽座公演の古鞆大夫の役場は、「松王首実検」切(三味線④重造)。

(51) 昭和14年4月地方巡業の演目未詳。

(52) 昭和15年正月四ツ橋文楽座公演の古鞆大夫の役場は、「熊谷陣屋の段」切(三味線④清六)。

(53) 近世の「因講」に由来する演者の組織で、昭和14年当時の名称は「因会」。昭和17年1月に改組して「日本因協会」が発足し、古鞆大夫が初代会長に就任。

(54) 近松作『日本振袖始』五段目を増補改作した文楽現行曲「大蛇退治の段」。「中座の大蛇退治」とあるのは、昭和15年1月大阪・中座の歌舞伎「神代物語 剣」「出雲簸の川の場」に、④織太夫・⑦団六他文楽座連中が特別出演したことを指す。

(55) 前掲注(52)。

(56) 昭和15年2月四ツ橋文楽座公演の古鞆大夫の役場は『天網鳥』「紙屋内」切(三味線④清六)。

(57) 「松葉屋」は、明治37年没の⑤豊沢広助の通称。ここは、⑤広助の養子である⑦広助を指すか。

(58) 白井松次郎。

(59) 昭和13年9月22日消印の鴻池宛て封筒には、竹本綱太夫(代数未詳)の墓石の写真や浄瑠璃関係者の肖像写真など、鴻池と古鞆太夫との間でやりとりされたと思われる写真九葉が入っている。

(60) 杉山其日庵著『浄瑠璃素人講釈』(大正15年、黒白発行所)未詳。

(61) 森下辰之助(明治14〔1881〕—昭和15〔1940〕)カ。

(62) 女流義太夫の豊竹小仙(明治28〔1895〕—昭和54〔1979〕)カ。

(63) 昭和15年5月四ツ橋文楽座公演において、古鞆大夫門の豊竹太夫が⑤竹本雛太夫を襲名したことを指すか。

(64) 古鞆大夫は、昭和15年7月四ツ橋文楽座の納涼若手公演、8月

東京・明治座公演には不参加。9月下旬の東京・新橋演舞場における素浄瑠璃公演に出演し、『絵本太功記』『尼崎の段』切(④清六)を語っている。

(66) 未詳。

(67) 『若屋道満大内鑑』『葛の葉狐別れの段』。ラジオ放送については未詳。

〔演者名一覧〕

- ・ ⑦中車 [1]
- ・ 三二改め野澤喜八郎 [3]
- ・ ①勝平(↓②喜左衛門) [3]
- ・ ⑧三三二 [3]
- ・ 三三改め蟻鳳 [3]
- ・ 曾和太夫 [3]
- ・ ②若太夫(↓②嶋太夫) [3]
- ・ ①春太夫 [3]
- ・ ②つばめ太夫(↓④織太夫↓⑧綱太夫) [6]
- ・ ⑬ [14] [16] [19] [20] [23]
- ・ ⑥豊澤猿糸 [6]
- ・ ⑥友治郎 [7] [21] [22]
- ・ ①燕三(↓燕翁) [7]
- ・ ④清六 [8] [9]
- ・ 亀之助 [9]
- ・ ③長門太夫 [9] [12]
- ・ 越太夫(代々) [11]
- ・ ③重太夫(↓⑤政太夫) [11]
- ・ ⑤鍛太夫 [11] [16]
- ・ ④大隅太夫 [11] [16] [19] [22]
- ・ ⑦文字太夫(↓⑥住太夫) [11] [13] [14] [16] [18] [19]
- ・ ③相生太夫(↓相生翁) [11] [16] [19]
- ・ ③呂太夫(↓⑩若太夫) [11] [19]
- ・ ④伊達太夫(↓⑦土佐太夫) [11] [18] [19]
- ・ 綱太夫(代々) [12]
- ・ 撰津大掾(②越後太夫↓) [12] [18] [21]
- ・ ⑤春太夫 [12] [13] [14] [18] [21]
- ・ ⑥広助 [12] [21]
- ・ ④重蔵 [12]
- ・ ①重蔵 [12]
- ・ ⑤吉弥(↓⑤吉兵衛) [12]
- ・ 岡太夫 [12]
- ・ 山城掾 [12] [21]
- ・ ①古鞆太夫 [12] [21]
- ・ ④春太夫 [13] [14] [18]
- ・ ④叶太夫 [13] [14]
- ・ 辰五郎(代々) [15]
- ・ ②吉川才治
- ・ 兵吉(代々) [15]
- ・ ⑦駒太夫 [16] [19]
- ・ ③津太夫 [16] [19] [22] [23]
- ・ 文字太夫(代々) [18]
- ・ ②組太夫 [18]

- ・③綱太夫 [18]
- ・④岡太夫 [18]
- ・⑥政太夫 (④重太夫↓) [18]
- ・⑥伊勢太夫 [19]
- ・⑦団六 (↓⑩弥七) [20] [23]
- ・④広助 [21]
- ・住太夫 (代々) [21]
- ・紋太夫 (代々) [21]
- ・津賀太夫 (代々) [21]
- ・湊太夫 (代々) [21]
- ・八重太夫 (代々) [21]
- ・巴太夫 (代々) [21]
- ・播磨太夫 (代々) [21]
- ・①清六 [21]
- ・播磨少掾 (③義太夫) [21]
- ・播磨大掾 (②土佐太夫) [21]
- ・名護屋播磨太夫 [21]
- ・③政太夫 [21]
- ・綾瀬太夫 (代々) [21]
- ・相生太夫 (代々) [21]
- ・重太夫 (代々) [21]
- ・文蔵 (代々) [21]
- ・④長登太夫 [21]
- ・⑥中太夫 [21]
- ・⑤弥太夫 [21]
- ・②団平 [21] [22]
- ・⑤広助 [21]
- ・①長鳳 (①長尾太夫↓) [21]
- ・④住太夫 [21] [22] [23]
- ・②大助 [21]
- ・②叶 [21]
- ・⑥染太夫 [21]
- ・⑤駒太夫 [21]
- ・②津嶋太夫 [21]
- ・③勢見太夫 [21]
- ・①豊造 [21]
- ・④才治 (↓⑤竹沢権右衛門) [21]
- ・②久太夫 [21]
- ・④浪花太夫 [21]
- ・⑧染太夫 [21]
- ・⑤清七 [21]
- ・⑤岡太夫 [21]
- ・⑧内匠太夫 [21]
- ・⑥時太夫 [21]
- ・⑥組太夫 [21]
- ・①呂太夫 [21]
- ・④重太夫 (⑥むら太夫↓) [21]
- ・⑥綱太夫 [21]
- ・⑧紋太夫 [21]
- ・②津太夫 [21]
- ・①綾瀬太夫 (①相生太夫↓) [21]
- ・⑤吉兵衛 [21]

- ・⑥吉弥 [21]
 - ・⑥三二 [21]
 - ・②広左衛門 [21]
 - ・⑤友治郎 [21]
 - ・浜大夫改め④竹本津賀大夫 [21]
 - ・④むら大夫 [21]
 - ・②竹本長尾大夫 [21]
 - ・⑤鶴澤豊吉 [21]
 - ・⑤友次郎 [21]
 - ・③友之助 [21]
 - ・④豊吉改め⑦鶴澤伝吉 [21]
 - ・③清十郎 [22]
 - ・③大隅大夫 [22]
 - ・浜右衛門 (代数未詳) [22]
 - ・小仙 [22]
 - ・竹澤籠造 (↓豊竹和田大夫) [23]
 - ・野澤八百蔵 (代数未詳) [23]
 - ・竹本由良大夫 (代数未詳) [23]
 - ・竹本春尾大夫 (代数未詳) [23]
 - ・江戸八十大夫事春大夫 [23]
 - ・⑤土佐大夫事播磨翁 [23]
- 〔作品名一覽〕
- ・仮名手本忠臣蔵 [1] [2] [11] [11] [12] [16] [22] [23]
 - ・北条時頼記 [2]
- ・伊賀越 [2] [11] [18]
 - ・姫小松子の日遊 [3]
 - ・伊勢物語 (チヨボ) [3]
 - ・健仁寺供養 [5]
 - ・復鳥羽恋塚 [5]
 - ・紀三井寺 [5]
 - ・傾城躑躅ヶ岡 [5]
 - ・山王権現八千代玉垣 [5]
 - ・隅田川 (加賀) [5]
 - ・風流たばこ恋集 [5]
 - ・嬌柳妹背之的 [5]
 - ・敵討稚文談 [7]
 - ・誠忠義士銘々伝 [9]
 - ・廓景色雪之茶会 [9]
 - ・義経千本桜 [9] [11] [12]
 - ・夏祭浪花鑑 [11] [12]
 - ・木下薩狭間合戦 [11] [11]
 - ・源平布引滝 [11]
 - ・祇園祭礼信仰記 [11]
 - ・玉藻前曠袂 [11] [11]
 - ・鬼一法眼三略卷 [11]
 - ・彦山権現誓助剱 [11] [11]
 - ・絵本太功記 [11]
 - ・大江山酒呑童子 [11]
 - ・箱根靈驗鬪討 [11]
 - ・里見八犬伝 [11]

- ・生写朝顔話【11】【19】
- ・三日太平記【11】
- ・伽羅先代萩【11】【12】
- ・鎌倉三代記【11】
- ・奥州安達原【11】
- ・八陣守護城【11】【12】
- ・ひらかな盛衰記【11】
- ・大和錦朝日旗揚【11】
- ・三国無双奴請状【12】
- ・花上野誉石碑【12】
- ・近江源氏先陣館【12】
- ・冥途の飛脚【12】【17】
- ・一谷嫩軍記【12】【20】【21】【22】
- ・菅原伝授手習鑑【12】【19】
- ・嬢景清八島日記【16】
- ・勸進帳【16】
- ・三十三間堂棟由来【16】
- ・団子売【16】
- ・摂州合邦辻【18】
- ・道中膝栗毛【19】
- ・増補日本振袖始(歌舞伎『神代物語 劔』)【20】
- ・心中紙屋治兵衛【21】
- ・芦屋道満大内鑑【23】

※本稿は、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」(A09351900)による研究成果の一部である。